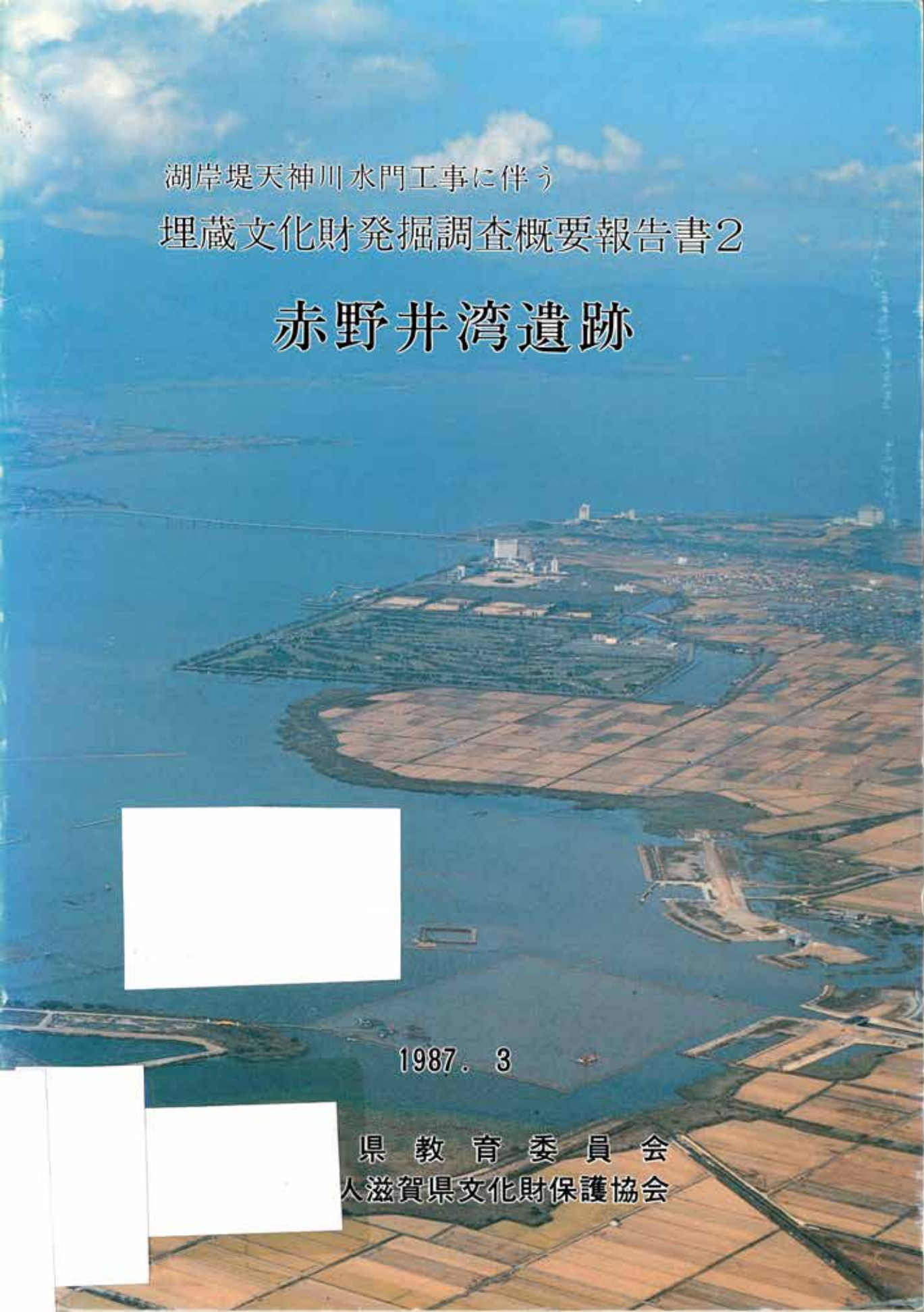
湖岸堤天神川水門工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書2

赤野井湾遺跡



1987. 3

県教育委員会
人滋賀県文化財保護協会

湖岸堤天神川水門工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書2

赤野井湾遺跡

1987. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕跡であり、大地に残された歴史資料であります。

この中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獣を追い求めた縄文人、新しく農耕をとり入れた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思います。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて面的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに湖岸堤天神川水門工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思います。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ礎となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長　飯　田　志農夫

例　　言

1．本書は湖岸堤天神川水門工事に伴う赤野井湾遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和61年度に発掘調査を実施したものである。

2．本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関となり実施した。

3．本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
管理係主任主事	山本　徳樹

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査一係長	田中　勝弘
調査一係技師	濱　修
総務課長	山下　弘
総務課主任主事	松本　暢弘
同	立入　裕子

4．本書の執筆・編集は濱を中心として行った。

5．本書で使用した方位は磁針に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

6．出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序　　文

例　　言

I　調査の概要…… 1

1．遺跡の位置と環境

2．調査の経過

II　遺構の概要…… 5

1．下 層 遺 構

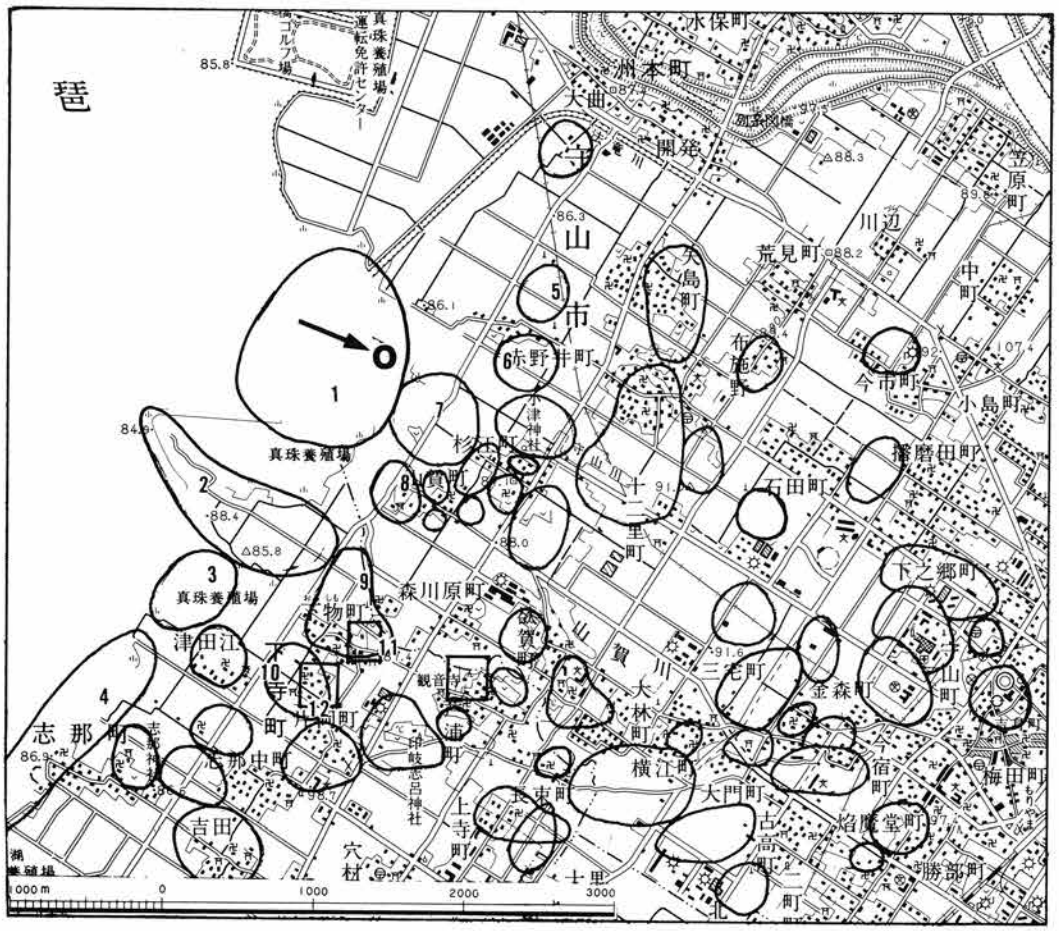
2．上 層 遺 構

III　出土遺物の概要…… 18

1．土器、石器、鉄器

2．木　製　品

IV　ま　と　め…… 47



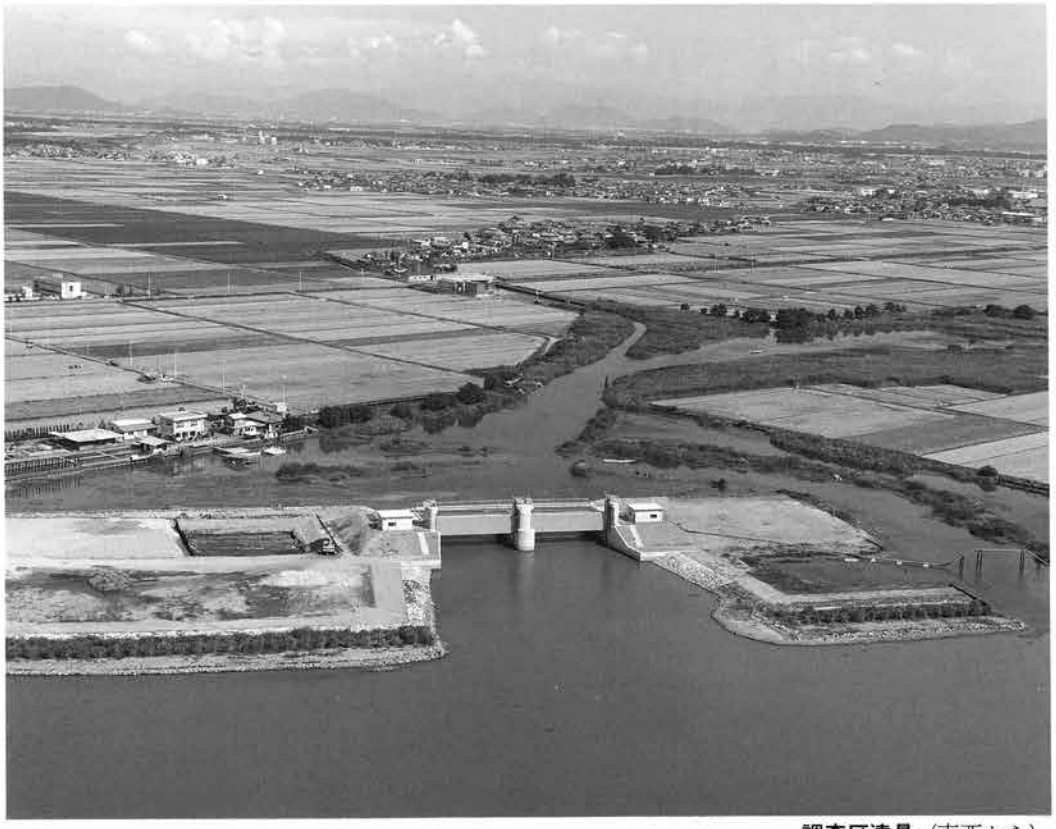
調査位置図

1．赤野井湾遺跡　2．烏丸崎遺跡　3．津田江湖底遺跡　4．志那湖底遺跡
5．弘前遺跡　6．赤野井浜遺跡　7．小津浜遺跡　8．山賀西遺跡
9．下物遺跡　10．皆出遺跡　11．花摘寺廃寺遺跡　12．観音堂廃寺遺跡

Ⅰ．調査の概要

1．遺跡の位置と環境

赤野井湾遺跡は守山市赤野井町地先にある湖底遺跡である。赤野井湾は、北は守山市木浜地先から、南は草津市烏丸半島に囲まれた地域で、法竜川、矢島川、天神川、守山川、山賀川、境川など大小の河川が流れ込んでいる。湖底は厚さ1m近いヘドロや泥土が堆積しているが、現在も淡水真珠の養殖が行われ、近年まで大型の魚漁も営まれていた。湖岸には葭の生い茂る広大な湿地があり、魚の産卵や、水質



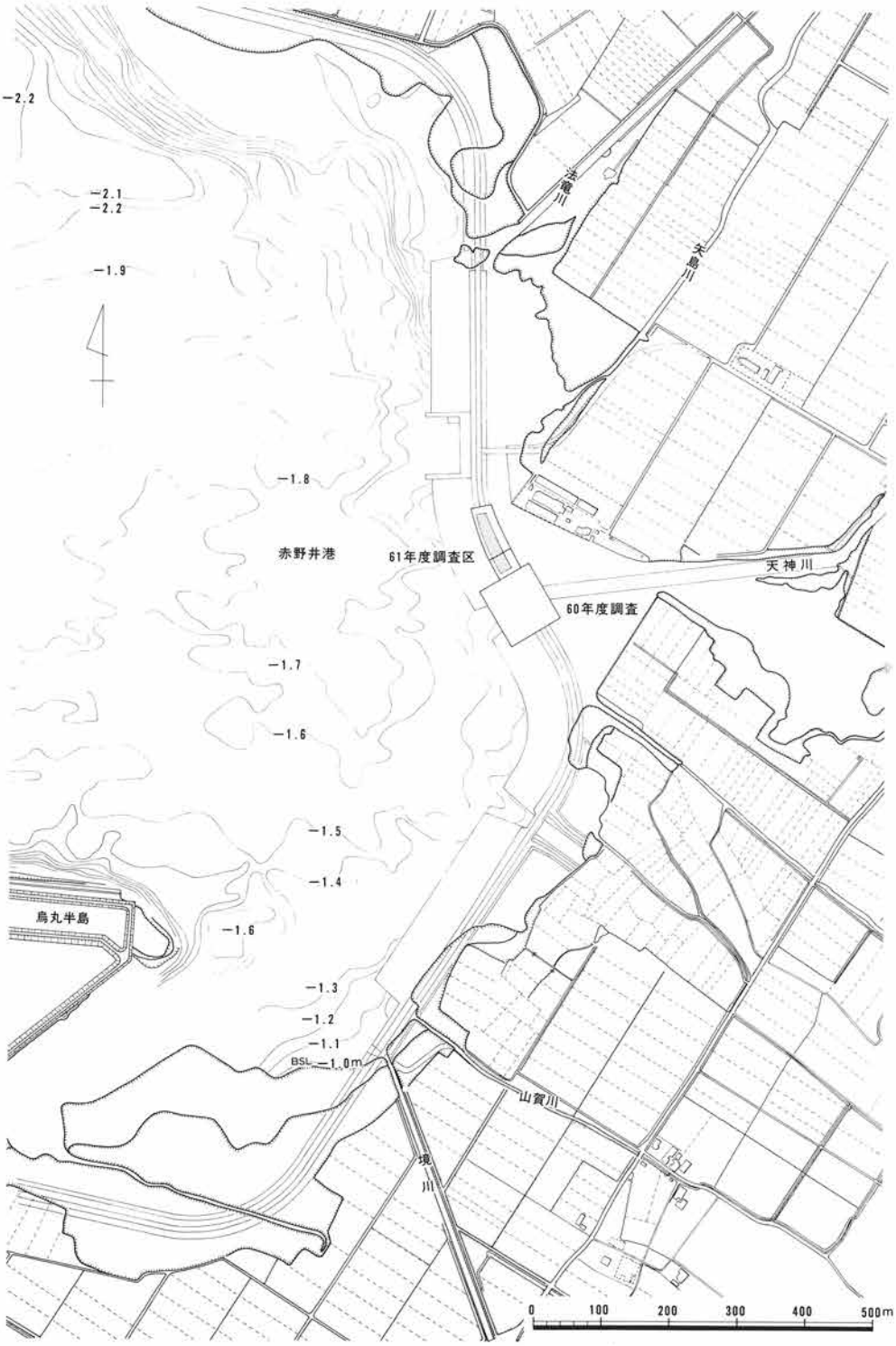
調査区遠景（南西から）

の浄化に役立っていたが、現在は近代的水門や、湖岸堤管理用道路に変わりつつある。

また、赤野井浜は古くから港として栄え、浜には蓮如が堅田から上陸した地点と伝えられる蓮如上人箸塚や、天神川の水路を上ると赤野井町には船入りを持った諏訪屋敷もある。昭和20年代まで大津を結ぶ汽船航路の港でもあった。

赤野井湾遺跡は、湾内の湖中地域では昭和58・59年度の潜水による分布調査で縄文時代早期から平安時代までの遺物が出土することが確認された。60年度は湾入口の消波堤工事に伴う事前調査で、鋼矢板締切の発掘調査をした所、縄文時代後期を中心とする土器が検出された[注(1)]。また、61年度湾内で四ヵ所の鋼矢板締切調査が行われたが、縄文時代早期・中期、弥生時代前期・中期、平安時代を中心とする土器群が発見された。とりわけ、烏丸半島寄りの調査区では水面下3.5mほどで、縄文時代早期の集石炉や、土壙群が検出され、赤野井湾が県下でも貴重な遺跡であることが確認された。

また、湖岸地域では、59年度の法竜川河口の調査で、縄文時代後期の良好な土器


−2.2
−2.1
−2.2
−1.9
−1.8
赤野井港
61年度調査区
60年度調査
天神川
−1.7
−1.6
−1.5
−1.4
烏丸半島
−1.6
−1.3
−1.2
−1.1
BSL −1.0m
山賀川
境川
0
100
200
300
400
500m

調査位置図

群が検出されたほか、60年度の天神川水門工事に伴う調査で、水面下1.8m前後で、弥生時代から古墳時代の遺構が検出されたほか、多量の木製品、土器、瓦などが発見された[注(2)]。また、新守山川河口から、烏丸半島にかけても多くの遺物が出土して、湖岸においても遺跡の広がりが確認された。更に、湾の南部の烏丸半島では、弥生時代中期の玉造工房や、方形周溝墓群などが発見されている。

このように、赤野井湾は琵琶湖の水位の変動に伴って遺跡の消長したことがうかがえる。

2．調査の経過

調査は61年4月から62年3月まで行い、現地調査は61年10月まで行った。調査地区は60年度調査した天神川水門の北側から、新赤野井港までの湖岸堤地域で、南北110m、東西28～36mの範囲を鋼矢板で締切り、北側3分の2をA区、南側をB区として、A区より調査を開始した。

調査は前年度検出した白鳳時代の瓦群の包含層直上まで重機で掘下げ、順次、古墳時代・弥生時代の遺構面を検出し、最後部分的に火山灰層の確認調査を行った。

その結果、古墳時代後期までの流路、足跡群、鮎跡、弥生時代後期の流路など、大きく分けて二時期の遺構面が確認された。それと共に多量の土器、木製品が出土した。

基本土層は低湿地の堆積のため、トレンチによってやや異なっているが、A区中央部では、湖底面が83.20mで上層からⅠ—黒褐色泥土層、Ⅱ—黒褐色粘質土層、Ⅲ—黄褐色細砂層、Ⅳ—暗褐色腐植土層、Ⅴ—黒褐色粘土層、Ⅵ—暗青灰色粘土層、Ⅶ—火山灰層が80.60mで検出された。Ⅱは古墳時代、Ⅳは弥生時代のベースとなる層である。最下層の火山灰は赤橙色のガラス質で前年度の調査でも検出しているが、赤野井湾全域の80.00m～81.00mで見られ、縄文時代早期末から前期初頭の約6,300年前の鹿児島県鬼界カルデラのアカホヤ火山灰[注(3)]である。

注(1)　大沼芳幸『赤野井湾遺跡』、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和61年
注(2)　濱　　修『赤野井湾遺跡』、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和61年
注(3)　京都大学竹村恵二氏の分析、御教示による。

II. 遺構の概要

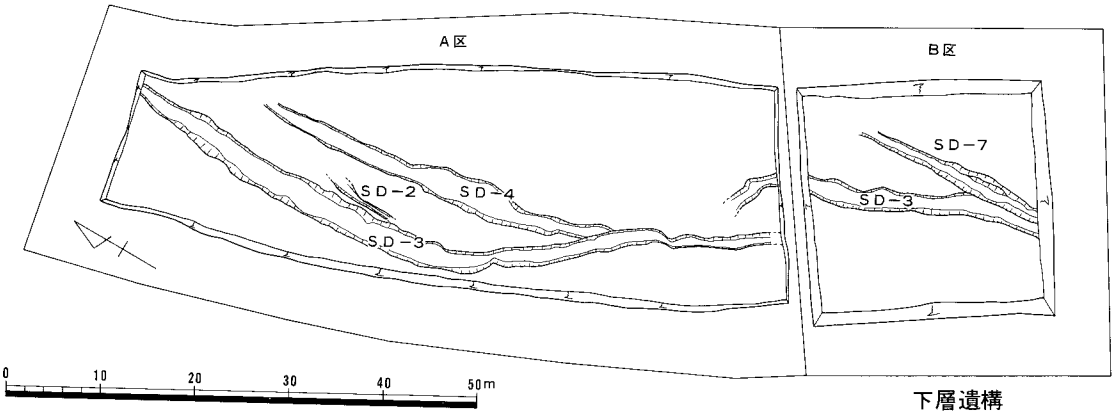
1. 下層遺構

下層遺構ではA区でＳＤ－２、ＳＤ－３、ＳＤ－４を検出し、B区でＳＤ－３、ＳＤ－７を検出した。いずれも流路で、人為的な溝か否かの決め手に欠けてはいるが、良好な木製品が出土している。土器の出土量はきわめて少量であるが、弥生時代後期の遺構と思われる。Ａ・Ｂ両区のＳＤ－３は出土遺物の性格からみて連絡する可能性は高い。遺構面の高さは82.30m～82.20mで、北流するものと思われる。流路の深さは10～20cmと浅いが、上部は削平されている可能性もある。埋土は青灰色か、灰色系の粗砂であり、ゆっくりとしたおだやかな流れと思われる。主な出土遺物には石庖丁形木製品が３点、携帯用火鑽板、木錘、赤彩有孔板（29頁図）などがある。

ＳＤ－４はＳＤ－３と切り合い関係を持つが、ほぼ同時期と考えられ、埋土はＳＤ－３よりもやや黄褐色系であった。深さはＳＤ－３と同様10cm前後で、土器、木製品とも出土量は少なかった。主な出土木製品は赤彩板（41頁下段図）がある。

Ｂ区のＳＤ－７はＳＤ－３に切られて、北方向に流れ、末端は古墳時代の流路であるＳＤ－１に切られている。木製品が数多く検出された。

60年度の天神川水門地区の調査で、弥生時代の溝が発見され、Ｂ区方向に遺構が延びることが予想された。今回検出された流路ＳＤ－３、ＳＤ－７など、前年度と同時期の遺物を含み、木製品の石庖丁形木製品、赤彩板など共通する遺物が多い。



下層遺構

A区　SD－2、SD－3、SD－4（北から）

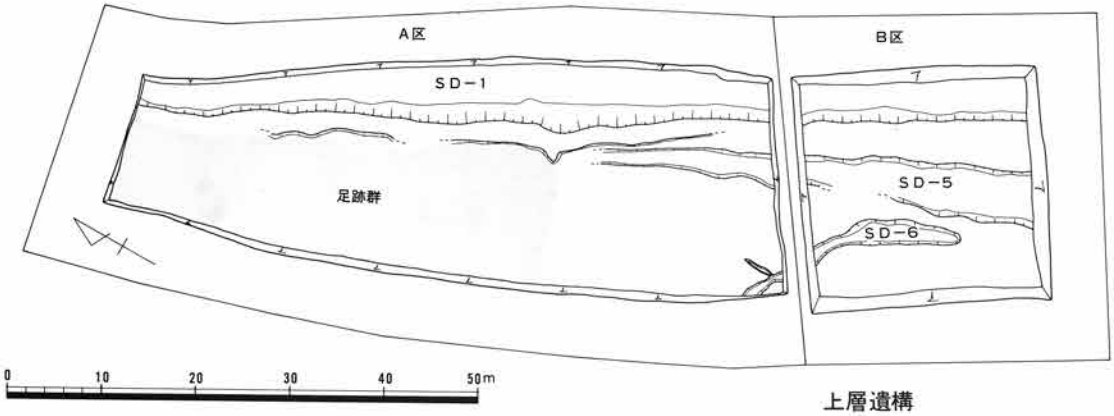
B区　SD－3、SD－7（南から）

2．上層遺構

上層遺構では、流路ＳＤ－１、ＳＤ－５、ＳＤ－６が検出されたほか、Ａ区西半にはほぼ全面的に足跡遺構が検出され、南西隅には鮎状遺構も発見された。また、ＳＤ－１のＡ区南西隅の肩には集石も見られた。

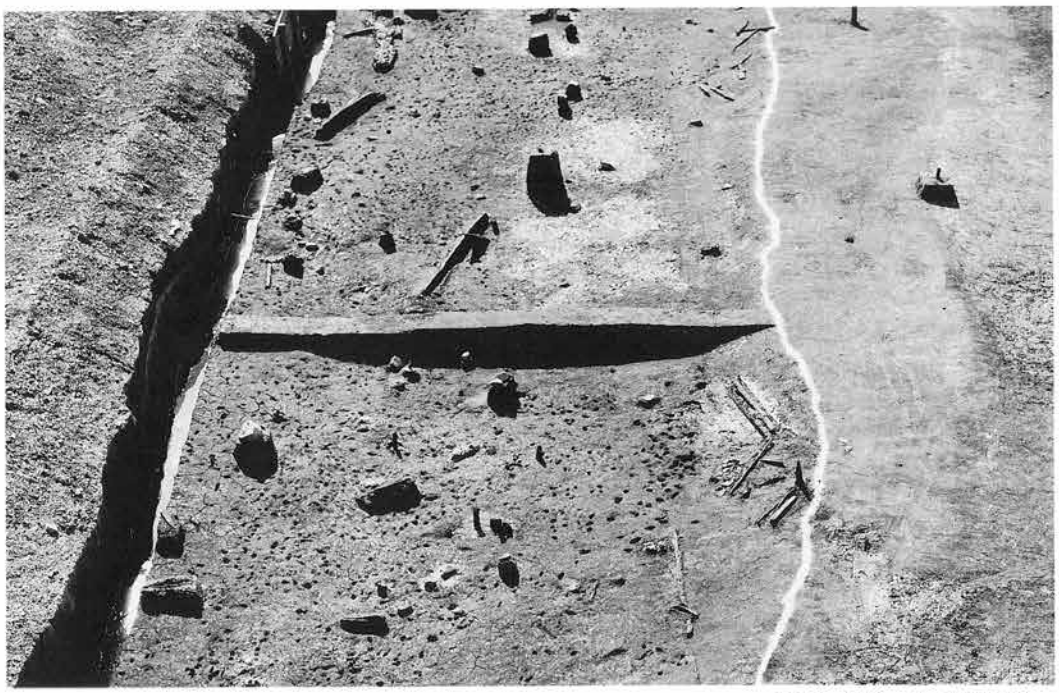
ＳＤ－１は弥生時代中ごろから、古墳時代後期までの土器を含む流路である。遺構面は82.60mから82.40mで、深さは約50cmあり、東側肩部分は調査区外のため検出できなかったが、推定すると幅10m弱になると思われる。この流路は、60年度調査した天神川水門地区で検出した古墳時代の溝ＳＤ－３と同方向であり、同種の遺物を出土することから、同一遺構と思われる。この流路の土器は、古墳時代前期の小型丸底を中心とした土器群と、後期の坏身・坏蓋を中心とした土器群に大別できる。流路の埋土は最下層に暗灰色の粗砂層があり、次に黒褐色粘質土、赤褐色の粗砂層が基本であった。遺物の出土状況と考え合せ何回も水位の増減があったと思われる。

また、流路内には、直径５cmから８cm大の杭列が多く見られ、中には六角形に面取りをしたり、ほぞ穴を持つ建築部材を再利用したものも多い。杭列の性格は明確ではないが、流路を利用した簗、川鮎、井堰などが考えられる。Ａ区南端の西側肩部から出土した集石は、10～20cm大の15個の自然石を北方向にＶ字状に開口して配



上層遺構

A区　ＳＤ－１（北から）



B区　ＳＤ－１（南から）

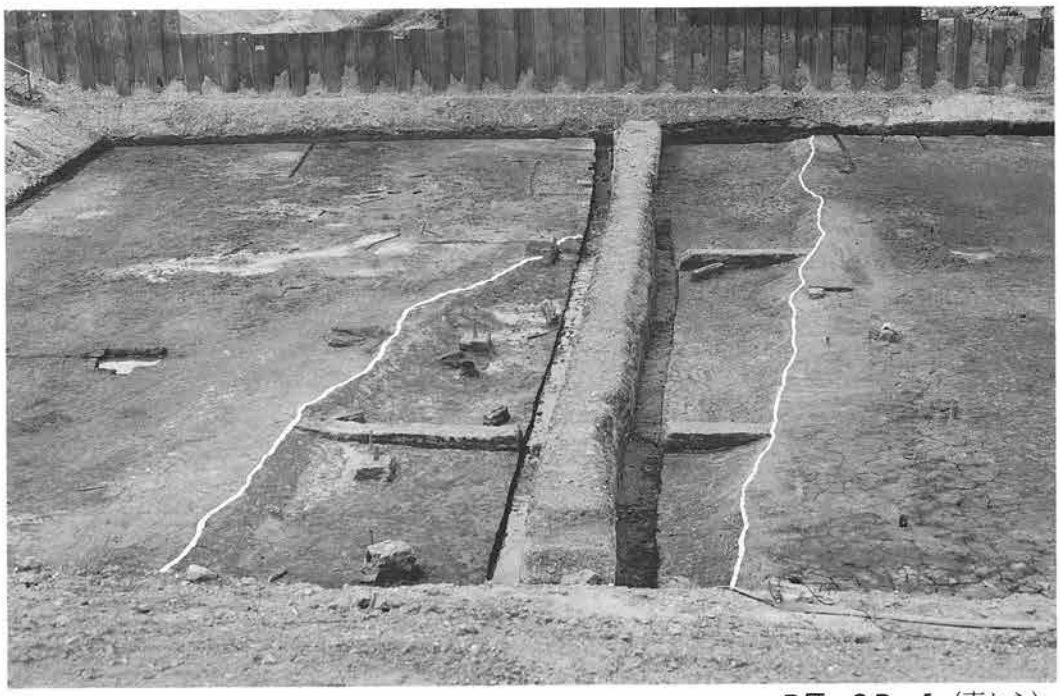
B区　ＳＤ－１木器出土状況

置されている。また、Ａ区ＳＤ－１の中央肩周辺では、人形土製品、手捏土器、丸玉、木製品では火鑽板、火焼した槽、部材、ナスビ形の鋤などと共に、10cm大の礫が10数個、火を受けて鋭く割れた状況で出土している。流路内からは製塩土器片なども出土している。この流路周辺で火を用いた何らかの行為が予想される。

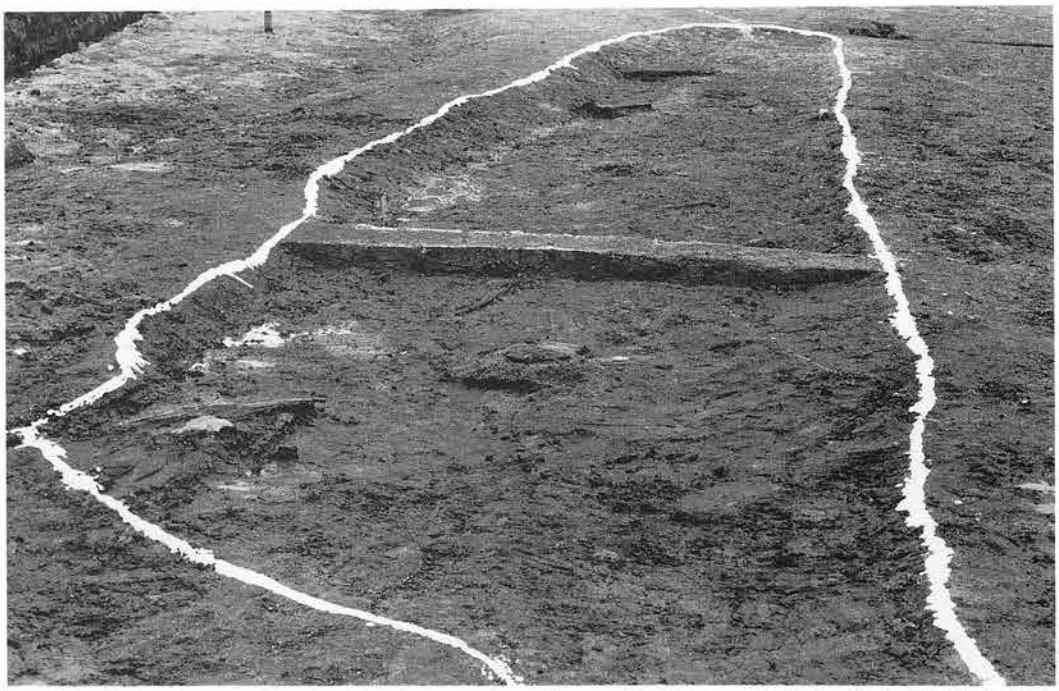
今回出土した主要な遺物の多くはこのＳＤ－１から出土した。主要なものは44頁上図、45頁などがある。

ＳＤ－５は、ＳＤ－１よりやや新しい時期と思われる。赤褐色粘質土と、暗灰色粗砂を埋土とし、土器の小片や木製品が出土している。この遺構からは舟形木製品の完型品（39頁下図）が出土している。

ＳＤ－６は、古墳時代の新しい時期と思われる。10cm前後の浅い流路で暗青灰色の粗砂を埋土としている。土器はほとんど出土していないが、広鍬が２点（33頁図上段）出土している点が注目される。



B区　SD－5（南から）



B区　SD－6（北から）

足跡実測図

足跡検出状況

足跡群

足跡群は調査区のほぼ全域で検出された。遺構レベルは82.40m～82.60mで、基本的に黒褐色粘質土を踏み込み、その上面を赤褐色または黄褐色の砂層が被っていた。足跡の凹みは5㎝前後であり、当時の土壌は水分を多く含み、粘質度が高かったことが推測される。個々の足跡については指跡まで確認できる程良好なものもあった。大きさは20㎝前後のものが多かった。この足跡群のなかには動物の足跡と考えられる楕円形やハート形、三角形の小穴もあった。今回、形、数量とも良好に検出された一部をサンプルとして、その方向性を分析したところ、北または北西方向への移動がみられ、その逆の南方向への移動はあまり見られなかった。

また、この足跡群の東側には流路ＳＤ－１が検出されており、古墳時代の遺物を多く含み、埋没が７世紀初頭と考えられる。足跡の面からは古墳時代の土師器が出土していることから、足跡群とＳＤ－１はほぼ同時期に存在したと推定できる。また足跡群はＳＤ－１に近づくほど密集度が高くなり、ＳＤ－１とほぼ平行に移動していることなどから、両者の関連性は高いと思われる。

足跡実測状況

近年、足跡遺構の検出例は多いが、そのほとんどが水田址に関連する遺構面からの検出である。60年度に調査した天神川水門地区[注(1)]で検出された足跡群も畦畔状遺構とともに検出されており、水田址の可能性が高い。

今回検出された足跡群は、水田址となる明確な遺構が見つかっていない。足跡群自体も、水田址で検出されるような平均的な密集度をもたず、極めて密集度の高い地点と、粗である地点との格差の大きいことや、足跡もＳＤ－１と平行方向に移動することなど、現在水田址と考えるより、他の状況を想定するほうが自然であると思われる。今後、プラント・オパールの分析結果や、全体のくわしい分析調査、本格的整理から明らかになるだろう。

鮎跡検出状況（南から）

鮎　跡

トレンチA区の南西側の黒褐色粘質土層で検出された。ＳＤ－１の時期よりやや新しいと考えられる。鮎ツボの外径は縦約1.20m、横約1.40mで鮎としては極めて小型である。

ツボの入口は測定値から見れば７～８センチであり、簀立の痕跡が鮮かに原型を形成維持している。鮎遺構の周辺では足跡も多数に検出され、同時期と考えられる大小の土錘、浮子（ブイ）と思われる木製品加工品等の漁撈遺物が隣接地点で出土している。

稲作技術の伝播に付随し鮎は大陸から渡来したと云われる[注(2)]。今回検出されたような鮎は小型で浅瀬で行なわれたレシーブ（待ち）型漁業[注(3)]で、タエリと云う名[注(4)]がついていて、水田や湖辺の湿地葦原に竹簀で作った簡単な簀囲いのものである。

今回検出された鮎跡はこの鮎と大きさ形状が非常に酷似している。又鮎ツボは現在の鮎と規模の点で大小を除き、そう相違のあるものでない。静岡県伊場遺跡では平安時代の鮎が出土している。

稲作技術と共に湖辺の低湿地帯や湖畔に生活する人々が常時動物たんぱく質食糧を自給出来る魞を据え、積極的に活用し、稲を収穫するが如く、手入を続けることによって、豊富な湖魚を四季を通し息長く獲り得ることが出来た。「おかず」[注(3)]獲りとして活用され、竹やヨシは湖岸湖辺に多く自生し魞造りの材料には苦労はなかった。

タエリは禁止前は湖岸に田を持つ農家のほとんどが、これを作って漁獲をした。[注(4)]検出された魞跡遺構周辺にも多くの足跡があり、現代のものと共通する。今後、湖岸湖底の調査が進むに連れ、魞跡遺構の発見が増えて来るものと思われる。

集石跡

A区SD－1の南西隅の肩部分より、15～20cm大の15個の自然石を利用し、主軸方向は真北を取り、北にV字に開いて位置する。土壙になる掘り方や、集石に伴う供献土器などは明確ではない。石質は花崗岩と蛇文岩の2種類で、加工痕などは認められない。集石の範囲は長さ約1.8m、裾幅約90cmである。SD－1との層位関係の分析は十分ではないが、SD－1の遺物の中心をなす5世紀前半と、6世紀後半のいずれかの時期のものと思われる。SD－1の肩部分では、A区中央付近では角礫が多数出土したり、火焼した木製品、手捏土器なども出土している。また、SD－1の内からは古手の管玉や紡錘車、布留式の小型丸底土器、舟形木製品などが出土している。6世紀後半ころの遺物としては、集落跡からの出土例が少ない提瓶や、土製人形、手捏土器、製塩土器などがある。これらの遺物は、河道で上流からの流出も考えられるため今後十分な検討を加えなければならないが、祭祀に伴う遺物と考えれば、川岸で何らかの祭祀が行われていたと思われる。

水辺における祭祀は、古墳時代では河川の底、中洲や湖底、池中などの遺物出土があり、歴史時代になると湖、沼、池、井戸、川など水霊に対する信仰として、和鏡や古銭、土馬の投入供献などがある。

当遺跡の集石跡や、祭祀的遺物などから考え合せ、水辺の祭祀が予想される。今後、湖岸や湖底の調査で新たな事実が解明されよう。

集石出土状況

注(1)　濱　修『赤野井湾遺跡』滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会　昭和60年

注(2)　倉田亨「水産物」『日本人の技術』研究社出版　昭和52年

注(3)　『琵琶湖』―その自然と社会、「琵琶湖の水産業」、サンブライト出版　昭和58年

注(4)　滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会『びわ湖の漁撈生活』、琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書　昭和53年

作業状況

Ⅲ．出土遺物の概要

今回出土した遺物は、流路ＳＤ－１を中心に土器、木製品、鉄器など多数出土した。

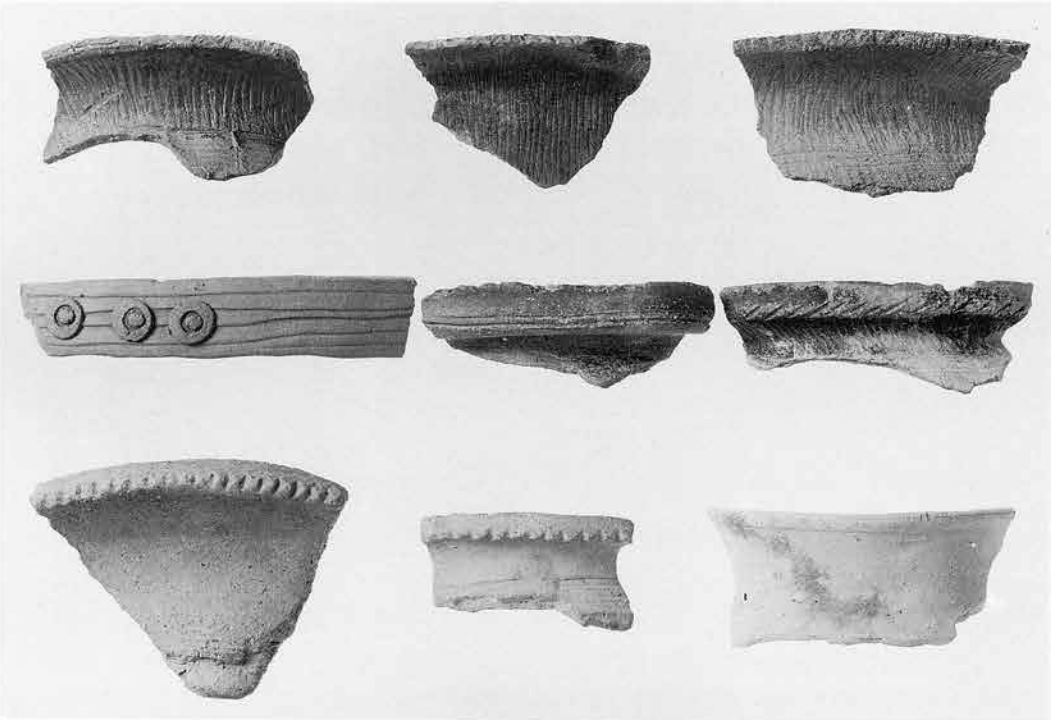
土器は縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器のほか、土製品として、土錘、土製人形、土鈴などが出土した。前年度80点出土した瓦は、丸瓦と平瓦の小片が数点出土しただけであった。

石器は砥石、石鏃、スクレーパーなどが出土し、石製品では有孔円板、管玉、紡錘車などが検出された。スクレーパーは風化が進んだものである。紡錘車は、碧石製で三つの段をもち、孔中にわずかに糸巻棒を残存させていた。

木製品は昨年度同様多量に検出された。木製品の出土は湖底の低湿地遺跡の特色でもある。数千年もかわらず形状を保ちつづけることは、地下で十分な水分を常時供給され、微生物や雑菌が遮断されることで腐敗が防止される。

今回出土した木製品には、鋤や鍬などの農具、舟形などの祭祀具、建築用部材、杭などがある。

鉄器には鉄鏃、鉄鎌などが出土している。いずれも、砂層の中で空気を遮断されていたためか、酸化はほとんど進んでいない。



弥生式土器

弥生式土器

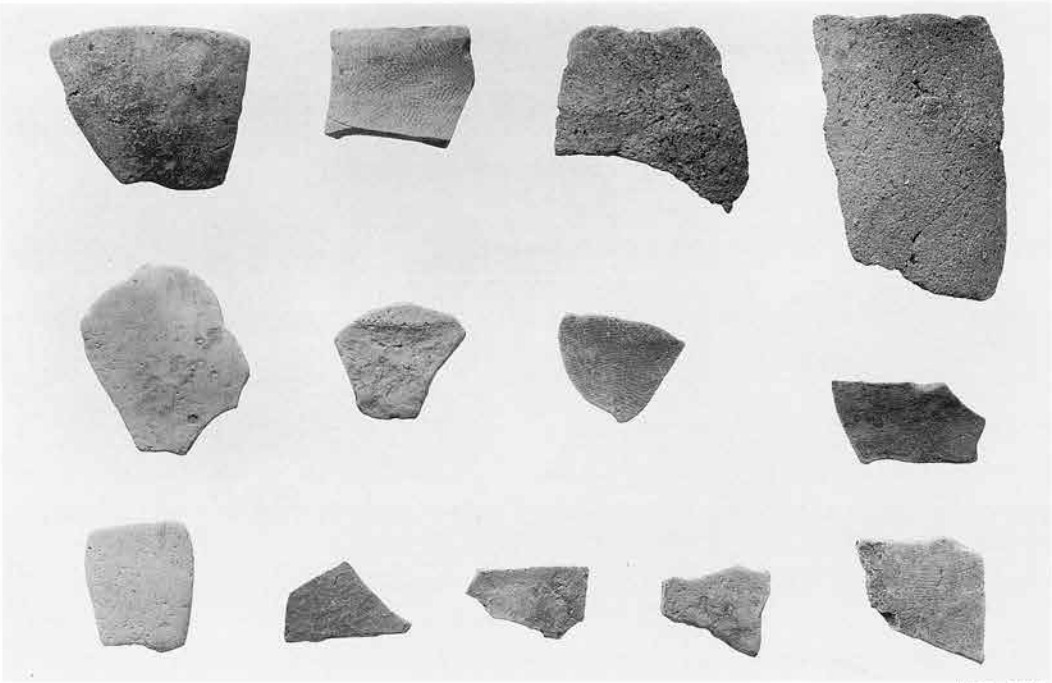
土師器

土師器

須恵器

須恵器

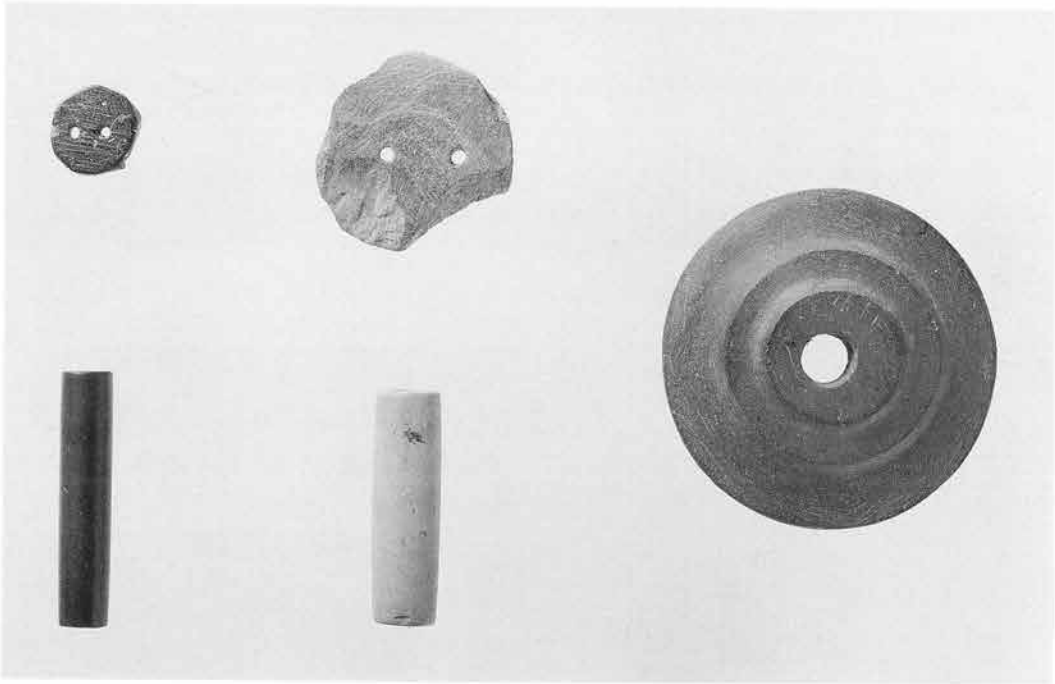
須恵器



製塩土器

土　錘

土製品



石製品

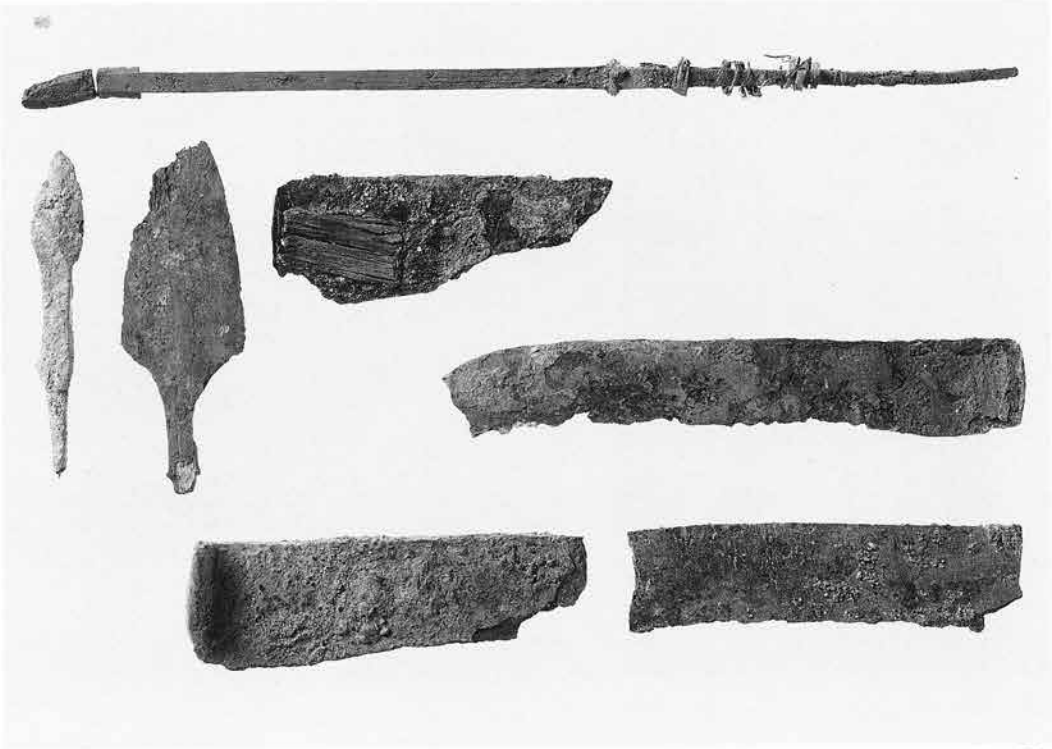
1．土器、石器、鉄器

須恵器

古墳時代中期ごろ朝鮮半島から伝えられた技術によって作られた青灰色の堅く焼き締った陶質土器の総称である。ろくろを使用して形成され、登り窯によって1000°C以上の高温で還元状態で焼き上げられた。当遺跡では杯類のほか、高杯、壷、短頸壷、提瓶などが出土しており、六世紀中頃を中心に五世紀末から七世紀初頭のものが見うけられる。とりわけ提瓶については、今回完型に近い形で二点の出土をみており、うち一点は配石遺構附近で出土していることもあり、他の祭祀遺物の出土ともあわせ当遺跡を特色づけるものである。

土師器

古墳時代から奈良、、平安時代にかけて制作された赤色系の素焼土器の弥生式土器の流れを汲むもので、おくれて使用されるようになった須恵器に比べ低い温度（850°C前後）で焼成されたこともあり、こわれやすく、吸水性も大きい。当遺跡では壷、甕、高杯、鉢、小型丸底壷などが出土している。



鉄　器

製塩土器

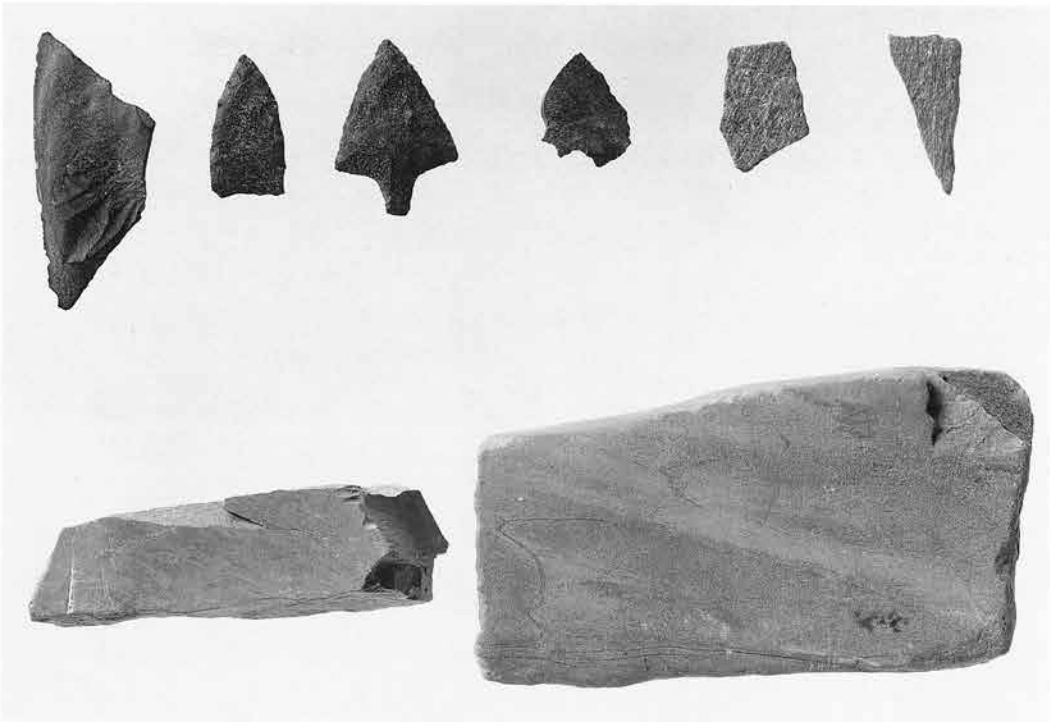
製塩土器は海水を濃縮させ、沸騰することで焼き塩としての固型塩や散水塩を作るための土器である。一般に薄手でもろいものが多い。内陸部で出土する製塩土器は、生産過程における最終的機能として固型塩作成用と、固型塩の運搬、貯蔵容器ではないかと考えられている。また、多くの場合、祭祀遺物が伴出したり、塩が呪術的性格を持つことから、祭祀的用途も考えられている。県下でも近年出土例が多く、現在12例あるが、守山周辺では森川原遺跡、横江遺跡、服部遺跡、吉身北遺跡、吉身西遺跡などで出土している。

石器・石製品

石器ではスクレーパー、石鏃、石鋸、砥石などが出土した。石鋸は紅レン片岩で玉造遺跡でグリーンタフを切断するのに利用されている。有孔円板はボタン型の石製模造品で、鏡の代用物とされている。

鉄　器

鉄鏃、鎌が出土している。24頁上図の鉄鏃は全長21.6cm、刃の長さ2.5cm、長茎の鏃である。鎌は5点出土している。弥生時代後期から、古墳時代にかけての穂つみ具の変化を考える上で重要である。



石　器

土製人形（どせいひとがた）

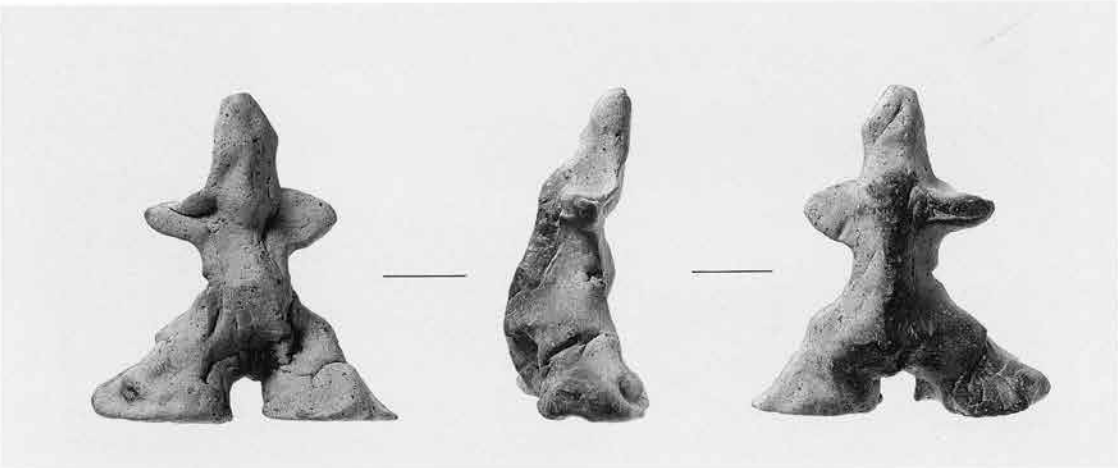
土製人形はＳＤ－１の肩近付の砂層から、手捏土器などと共に出土した。

この土製品は高さ9.4cm、幅8.7cm、厚さ3.7cmで、手捏で、土師質の素焼きである。正面から見ると、首をやや左に傾け、両手を大きく開き、足は力強く踏張って、頭を頂点とする二等辺三角形となっている。顔の目鼻立ちは明確ではないが、顔の両側は強く指で押えられて、古墳時代の人物埴輪に見られる男子の結髪の美豆良（みずら）にも似ている。肛門部分は意識して強く押し込んである。側面から見ると腰を引いてやや前傾姿勢となり、腹部は大きくつき出して妊婦にも似ている。これらの特徴から成人女性を意識した土製人形かと思われる。

土製人形は滋賀県では安土町小中遺跡[注(1)]から出土している。小中遺跡は三方を山、前面にはかつて内湖が広がっていた古墳時代の集落跡である。自然河道から古墳時代の土器と共に、土製人形４点、手捏土器などの祭祀遺物が出土している。土製人形は形状を知るもので、高さ４cmから６cm前後とやや小型で、全体的に抽象的な特徴から、やや古式の様相を示している。

土製人形の特徴について向坂鋼二氏は、浜松市坂上遺跡出土のもので、その形態をＡ～Ｅ型に分類している[注(2)]。坂上遺跡は古墳時代の祭祀遺跡で、７世紀代には終りをつげたとされる。赤野井湾遺跡のものは、向坂氏の分類ではＢ型の「全体に細作りで男女の区別はつけてあるが、顔の表現のないもの」に分類できそうである。

土製人形の出土例は全国で30件近くあり[注(3)]、古墳時代のものが中心であるが、弥生



土製人形

時代の出土例も増えている。出土地は平野を見渡す丘陵上や、峠道、谷合い、旧河道、古墳内などがある。兵庫県河高上の池遺跡[注(4)]では、古墳時代中期の竪穴住居跡からも出土している。

『肥前国風土記』佐嘉郡の条に土製の人形・馬形についての有名な記録がある。それには、佐嘉川上流の荒神が、従来の人々を害したため、荒神を鎮めるため人形・馬形を祀って、鎮めさせたというものである。

旧河道から出土している遺跡は、安土町小中遺跡、静岡県神明原・元宮川遺跡[注(5)]などがあるが、いずれも河神祭祀の遺物と考えられている。

今回出土した流路には、土製人形、手捏土器、製塩土器、火鑽板など祭祀に関する遺物が多い点で、河岸で三上山を正面にして、何らかの祭祀をしていたものと思われる。

土鈴（どれい）

古墳時代の包含層より出土したもの、残存高3.7cm、横幅4.1cm、縦幅4.5cmの土師質で、鈕は継ぎ目よりはずれ、丸（がん）もない。

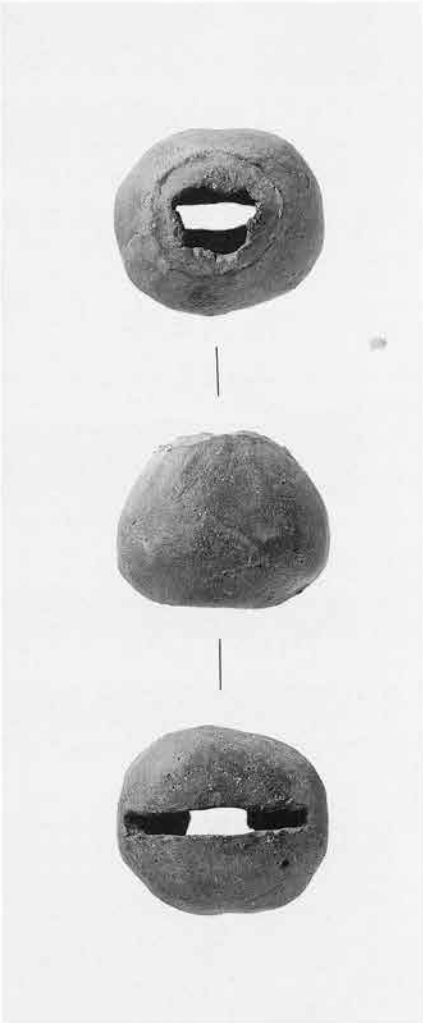
注(1) 石橋正嗣「小中遺跡における祭祀遺物出土の背景について」『滋賀考古学論叢』第2集　昭和60年

注(2) 向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』50巻1号

注(3) 亀井正道「浜松市坂上遺跡の土製模造品」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　昭和60年

注(4) 兵庫県立歴史博物館『発掘がかたる兵庫の歴史』　昭和61年

注(5) (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所『年報』Ⅰ　昭和60年



土　鈴

2．木　製　品

木製品は形状を知り得るもので、約200点が出土その他部材等を含めると、コンテナ約100箱分が出土した。黒褐色粘質土には多数の木製品が含まれ、また流路の砂流の中からも多数検出された。木製品は土器に比べると管理上の時間を数倍必要とする。一度乾燥してしまえば全く原形をとどめることなく変形してしまう。1960年代後半以降、P・E・G真空凍結乾燥法、アルコールエーテル法など保存技術が導入されてはいるが、今回のように多量の木製品は土器収納用コンテナに水づけしておくだけでしかない。湖底で2,000年近く眠り続けた木製品は多量の水分を含んで生き永らえてきたため、調査で取り上げたあとは、度々、浄水と取り替えねば腐敗してしまう。また、真夏になれば不充分な設備では数日でコンテナ内の水分は蒸発して、注意をおこたれば、たちまち変形してしまう。

このように手数のかかる木製品は、出土量が豊富な割に研究は進んでいない。

奈良国立文化財研究所[注(1)]は、木器の研究の困難さについて次の三点に要約している。

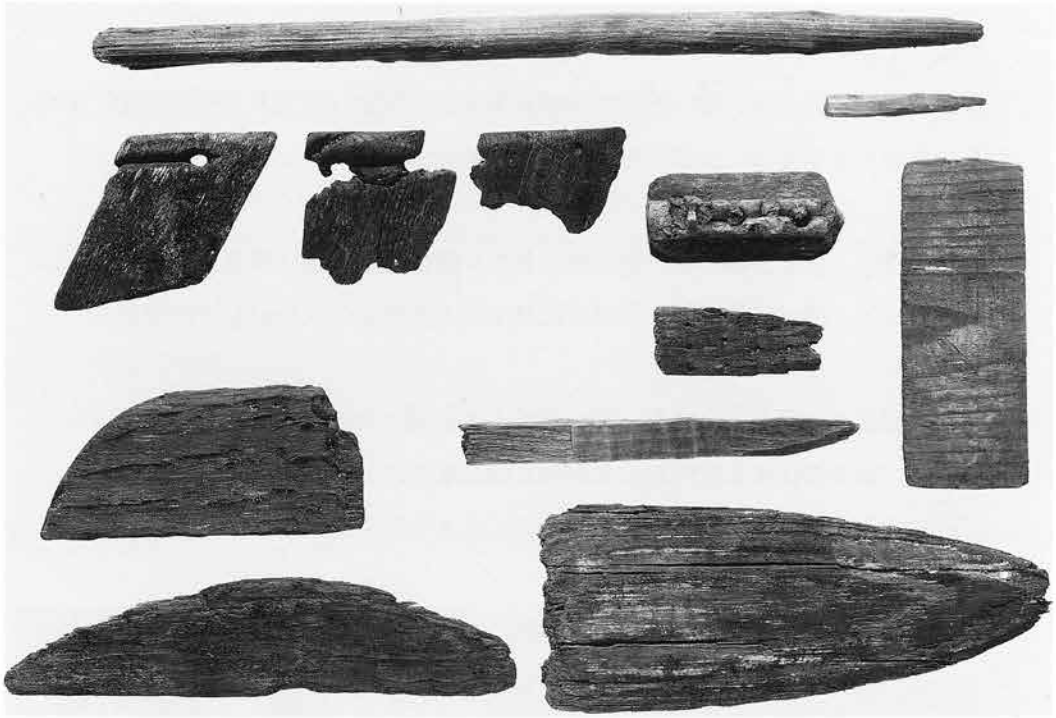
1．木器は材質が木であるという点が共通するだけで、用途が多方面にわかれ、用途を推測することに多くの研究時間を必要とし、部分の破片のみで用途を決定することが絶望的なときもしばしばある。

2．木器は出土後できるだけ早く保存措置をほどこさなければ、変形し消失してしまうおそれがある。このため出土直後に完璧な記録をとることが要請されており、この記録作業に大きな労力を費している現状。

3．いまなお大多数の木器は水漬状態で、保存しているのが実情である。

今回は主要な木製品の一部を写真撮影した。時代的には弥生時代から古墳時代までと思われ、古墳時代後半のものが中心と思われる。種類は農具、工具、容器、祭祀具、紡織具、漁猟具、部材のほか、多数の用途不明品である。個々の内容については、現在十分な検討を加えていないため、遺跡との関わりの中で論ずることはできないが、今後遺物保存と木製品研究のためにも迅速な処置が重要となろう。

注(1)　『木器集成図録』近畿古代篇、「序文」奈良国立文化財研究所　昭和60年



ＳＤ－３出土

ＳＤ－３出土

農具・工具

農具には耕具として、鋤、鍬、えぶり、馬鍬、田下駄、収穫具として、鎌、横槌、竪杵、木錘などがある。工具としては、斧の柄、刀子の鞘などが出土している。

漁獲具

たも、浮子、もり、櫂、船、弓などがある。櫂は出土点数は非常に多く、鋤と似た点もあるが、柄が非常に長く、身が細身で断面は凸レンズ型のものが多い。

容　器

容器の主流をなすものは食器、調理具であるが椀、大形盤、槽、曲物などが出土している。盤や槽は水上で利用したものと思われる。いずれもろくろを用いずに作った刳物である。

祭祀具

木製の祭祀具の基本形態は、実際の器物やきん獣を抽象化したもので、一般に形代とよばれている。概して1回限りの使用ののち、遺棄され、斎串、人形、馬形、刀形、舟形などがある。本遺跡では、舟形、刀子形、鏃形、赤彩木製品などが出土している。

部　材

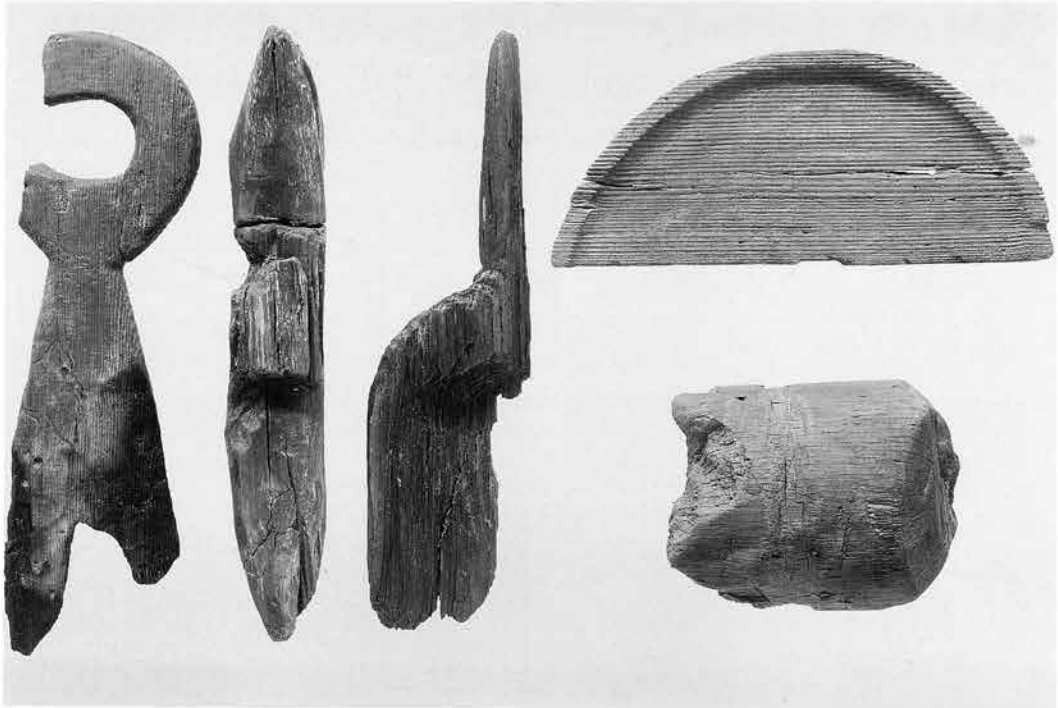
建築用部材としては、柱や方形の孔を穿った板材など多数出土している。柱は面取りを施したものがある。また台脚状の部材もある。

その他

紡織具や、下駄、火をおこす時に使う火鑽板などがある。また、水路内からは、ヤナに使用したと見られる多数の杭も出土している。

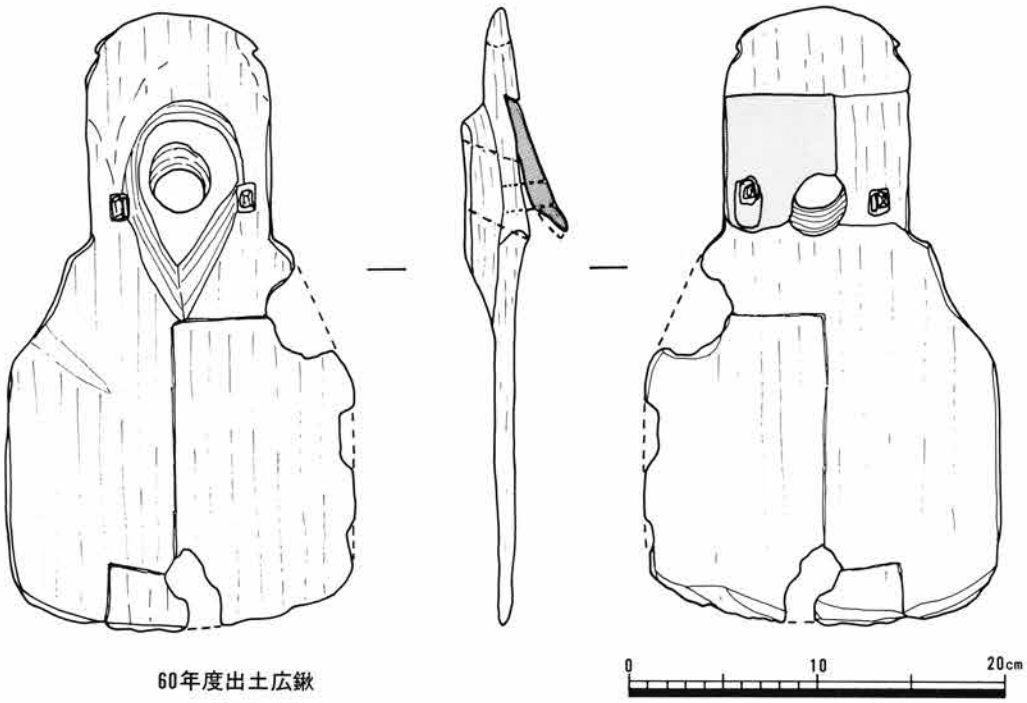
用途不明品

形態は明確であり、単独の形態をととのえているのであるが、いまのところ使用目的が不明なものをいう。今後調査研究が進むと、明らかになるだろう。35頁下段左、40頁中段、42頁右上半など多数ある。



広ぐわ

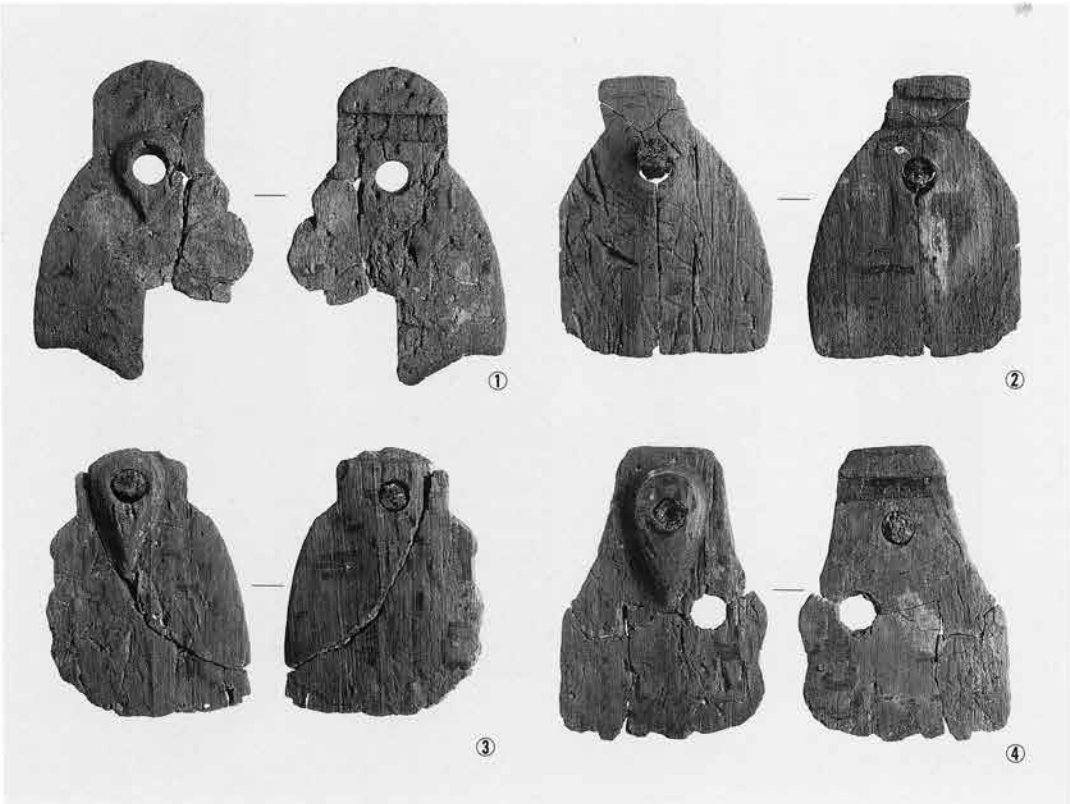
広ぐわは60年度、61年度調査で、現在までに明らかになった所では10点ほどある。今年度調査分では４点出現しているが、いずれも古墳時代のものであり、着柄隆起を持ち、反対面には「ありじゃくり」の溝を有する。黒崎直氏の弥生時代の農具の分類[注(1)]では広ぐわＦと呼ばれるものである。平面形状の特徴は、①、③が上辺が垂直に落ち、②は頸部がやや「く」の字状になり、着柄隆起はやや退化傾向にある。④は台形の形状を持っている。①以外はいずれも柄が着いているが、着柄の方向を示すほど長くはなく、着柄角は70°～80°である。60年度出土の広ぐわは、（広ぐわを再利用した狭ぐわ状のものを含め）いずれも着柄隆起と内面上部に「ありじゃくり」溝をもつ。その中で１点、着柄隆起の横に枘穴を穿ち、内面の「ありじゃくり」は内広台形でなく、くさび状に溝が切りこまれ、別木のあて板を着装して、柄内には目釘を用いて、着柄を補強している（下図）、この広ぐわは、他の広ぐわに比べ時代的にやや古いものと思われる。こうした広鍬の出土例は、北陸地方の近岡遺跡[注(2)]、江上Ａ遺跡[注(3)]などに見られ、北陸地方特有のものと云われている。

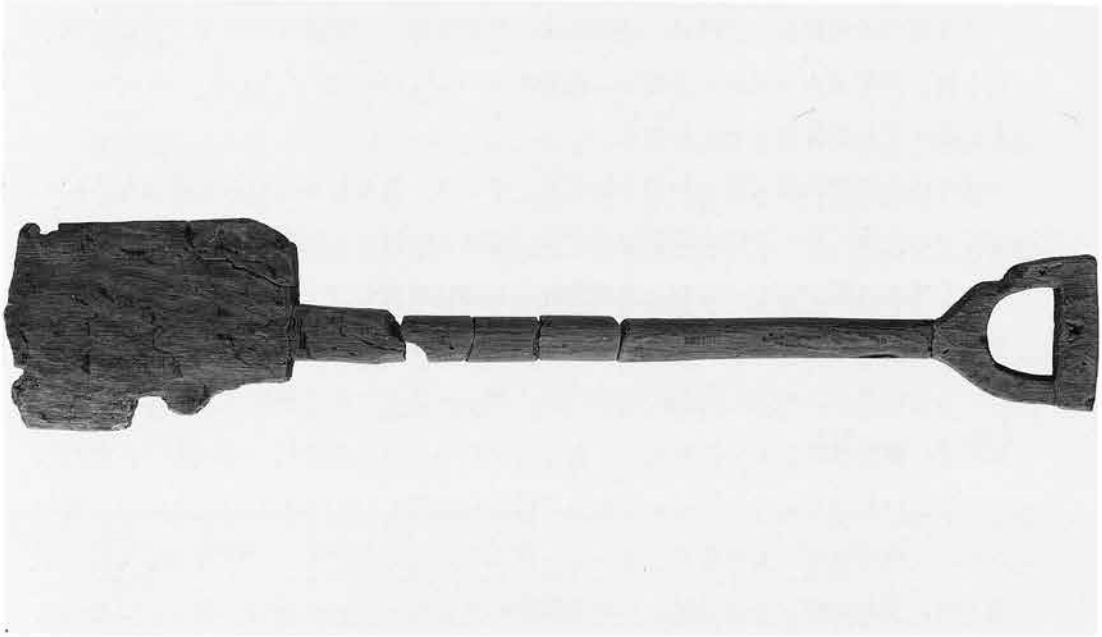


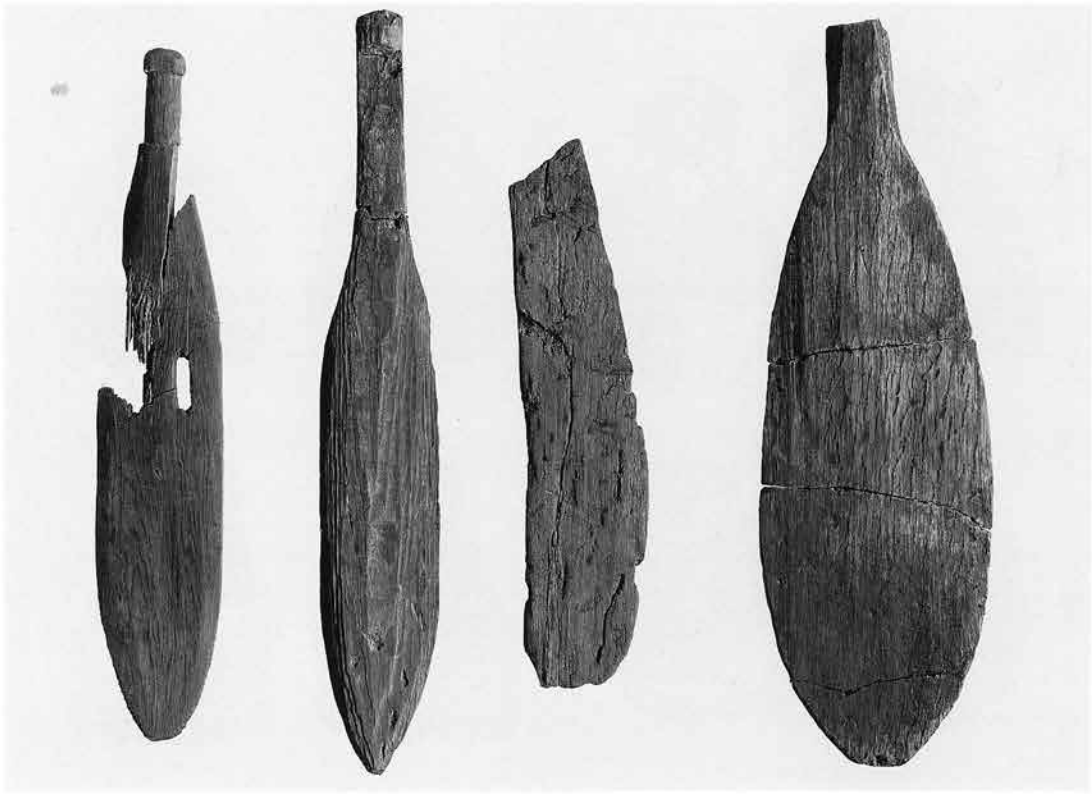
60年度出土広鍬

弥生時代の農耕具の変遷は、黒崎氏は、中期後半から後期にかけて大きな変化が見られ、開墾土木用農具が消滅し、近畿地方の広ぐわでは「広ぐわA～D」から「広ぐわE・F」の変化があるとする。[注(1)]

広ぐわの内面の段（広ぐわDではゲタ、Fでは「ありじゃくり」と呼ばれる）の付くものでは、弥生時代中期後半までは、ゲタと呼ばれる形態で、大中の湖南遺跡[注(4)]ではL字状に段がつく。また、着柄隆起の左右に枘穴の付くものは中期のものとして大中の湖南遺跡や、恩智遺跡[注(5)]のものが見られるが、いずれも内面に段や溝が施されたものはない。枘穴と内面の段または、溝が一体となって出現するものは、服部遺跡[注(6)]や、纒向遺跡[注(7)]のものである。しかし、これらの内面の溝はいずれも内広台形のもので、いわゆる広ぐわFとよばれる古墳時代の広ぐわの主流をなすものであるが、これも、枘穴の付く服部型と、付かない纒向型とに分類できる。枘穴の付くものは明らかに「あて板」を補強材として用いていたものと思われるが、現在、出土例は明らかでない。







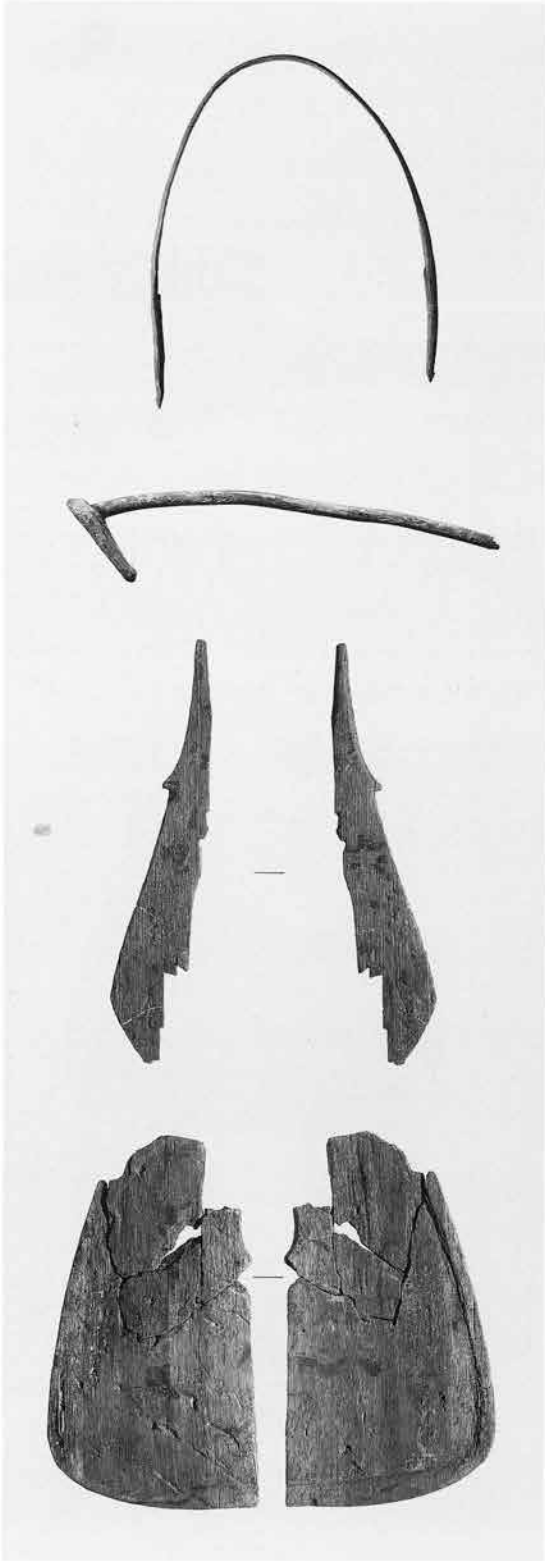
赤野井湾遺跡の60年度出土広ぐわは内面の「ありじゃくり」が台形でなく、断面で「く」の字となり、更に「あて板」や目釘をそなえている。内面の「ありじゃくり」が「く」の字の形態は、やがて内広台形へと変化発展すると考えれば、地域的な特色だけでなく、時代的な発展段階のなかで、第一の画期[注(8)]をなした過渡的形態ともいえる。

鋤

鋤は耕土を深く掘るのに適した道具で、土の反転や、溝の掘削等に利用されたものと思われる。

今回出土の主な鋤は、現代のスコップとよく似た一本の木から造り出した一木すきと、やや細身で、中央に一孔を穿ち、頂部に作った軸を利用し、柄を結びつけるものがある。これと表面形状は同じであるが、中央の穴のないものもあるが、これは着柄の方法で鍬にもなる。

また、身の幅が広く柄も長く伸びると思われるものがある。これは鋤というよりも櫂になる可能性が高いように思われる。組合せすきには従来「ナスビ形着柄鋤」



と呼ばれて来たものがある。この組合せ鋤はその着柄の方法で論議されてきたが、鋤の着柄は新旭町の針江中遺跡[注(9)]で、鍬の着柄は静岡県宮塚遺跡[注(10)]で出土して、両者ともに利用されていたものと思われる。当遺跡では昨年と合せて六点ほど出土しているが、完型のものはない。残存長で60cm弱あり、全体に細身である点を考えれば低湿地水田の鋤としての利用法が便利かと思われる。

えぶり

今日農業で用いるものには、収穫した穀物を乾燥させる時にならす場合と、水田の代かきの時、土の高低をなくし水を水平にはるために用いる場合がある。えぶりは直交する柄をつける耕具で、直刃のものと、鋸歯形のものがあるとされる。

当遺跡では鋸歯形のものが60年度に出土している。また平城京でみられる直刃のものでなく、弥生時代の丸鍬の形状に似て、鈍角に着柄し、身の内面上端に断面方形の段を持ち、刃部に方形の孔を穿ち、柄を箱まくら状の段でささえ、方形の孔で補強していたと思われるものもある。(35頁上段)、これは藤原宮[注(11)]や、米原町入江内湖遺跡[注(12)]からも出土して「えぶり形」とされている。内面を下に向ければえぶり、上に向けて用いれば鋤の機能をもつと思われる。

36頁下段の農具は内面の周囲に段をもつ。着柄方向は不明であるが、えぶりかまたは、土をのせて移動させる機能も考えられる。

石庖丁形木製品

当遺跡では弥生時代後期の流路から3点出土している(29頁上段)。60年度は完形品を含め4点出土している。県下でも低湿地遺跡の発掘が進むにつれて今までに6遺跡で15点が出土している。[注(13)] 時代的には、弥生時代中期から、古墳時代前期までに集中している。全国的にも30件近い出土例があり、近畿、北陸、山陰に集中している。用途については木製穂摘具とする考えが主流である。

用途不明木製品（37頁下）

残存高11.8cm、脚部の断面は円形になる。流路ＳＤ－３より出土した。底部は水平ではなく安定しない。頭部は欠損しているが、復元すると半径2cm程度の円形、中央が空胴となる。復元高は14～15cmとなる。長浜市の鴨田遺跡[注(14)]に類例があり高さ12.1cmで、形態はこれと同様と思われる。また、能登川町斗西遺跡[注(15)]では、古墳時代中頃の河跡から、玉杖形漆塗木製品が出土している。形態はやや似ているが側面が十字形になる点や漆塗など祭祀具的性格が強い。用途は不明であるが、35頁下段左も同じ遺構から出土している

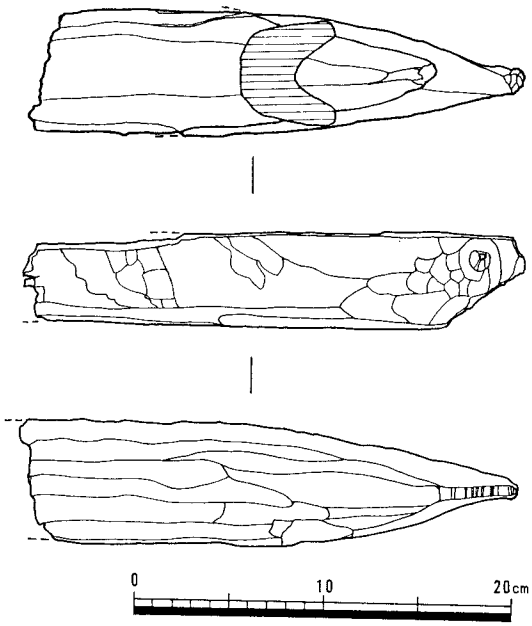
が、セットで考えると両者の穴を利用して照準器として利用したとも考えられる。

舟　形

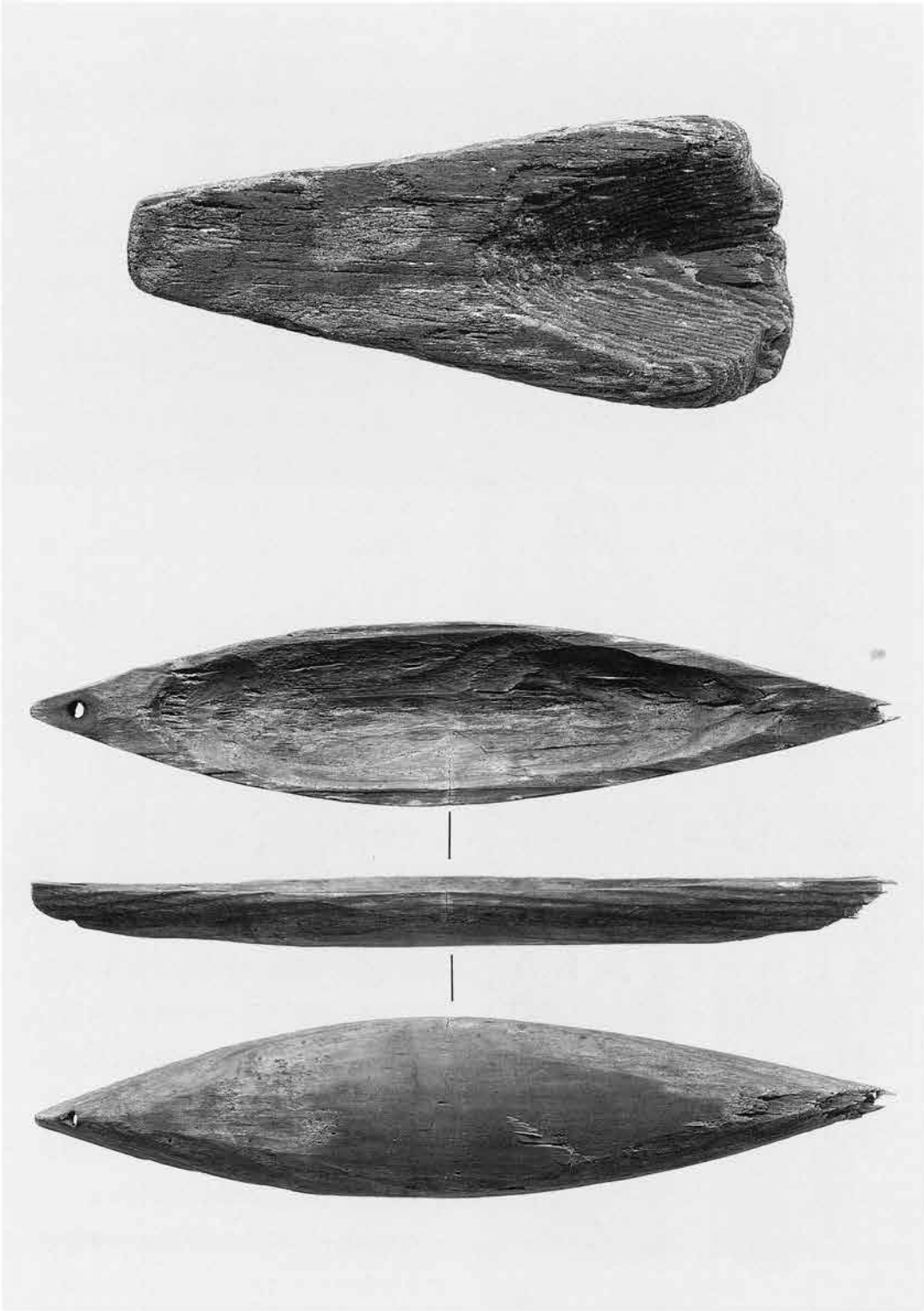
舟形木製品は今年度は３点出土した。いずれも古墳時代の流路からである。１点は残存長17.2cm、幅7.4cm、高さ4.8cmで艫（とも）にあたる部分と思われる。断面は広いＵ字形になると思われる。形態は60年度のもの（下図）と類似している。39頁下図は完形品で、長さ23.1cm、幅5.0cm、高さ1.9cmである。舳部と思われる部分に上面から直径５㎜の貫通孔がある。あと１点は31頁左２のものである。長さ30.0cm、中央部の高さ4.3cmの自然木の丸木の中央部分を残し両サイドの上３分の１を削り取り、段をつけ、舳艫部分も削り出して鋭角にしている。底部も面を持ち、安定感がある。自然の丸木をそのまま利用して、内部を刳り抜いていないため、他の舟形とは異質であるが、香川県金蔵寺下所遺跡[注(16)]にも同形の舟形が出土している。

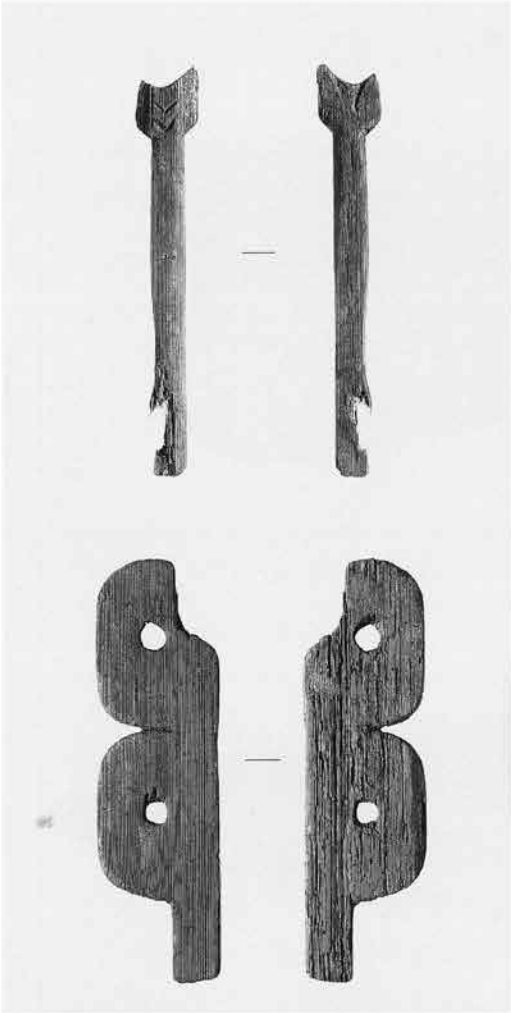
昨年と合せ合計４点の舟形が出土しているが、形態としては、内部刳り抜き形が３点で、丸木を削り出した物が１点である。内部刳り抜き形は、昨年と今年39頁上段は刳り抜きは深く、39頁下段は全長23.1cm、高さ1.9cmと小型であり、古墳時代でもやや新しい時期のものと思われる。

県下では低湿地遺跡を中心に10遺跡ほどから出土していて、旧河道や、湿地の包含層からの出土が多く、祭祀用具と伴出する例も多い。舟形木製品の用途は、舟の模造、玩具、祭祀具などが考えられている。当遺跡では明確な祭祀遺構からの出土ではないが、水辺の祭祀とも考え合せると、祭祀的性格の強い遺物である。

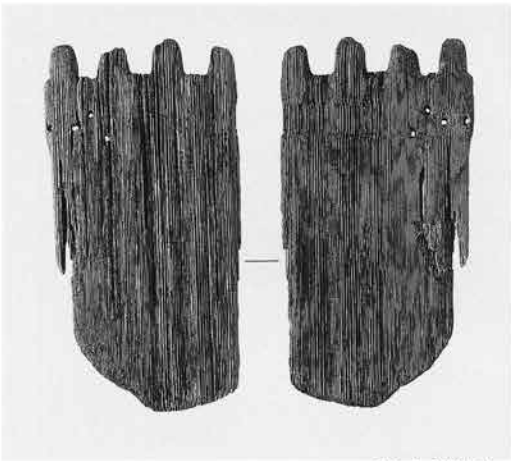


60年度出土舟形





用途不明木製品



琴形木製品

用途不明木製品（40頁上段）

全長32.9cm、柄の幅2.7cmである。頭部と柄の末部は一部欠損している。柄の下半部は表裏、両側面とも削り出している。頭部は欠損しているが表中央に二溝のV字の溝を掘り、裏面にも同様のV字溝がある。

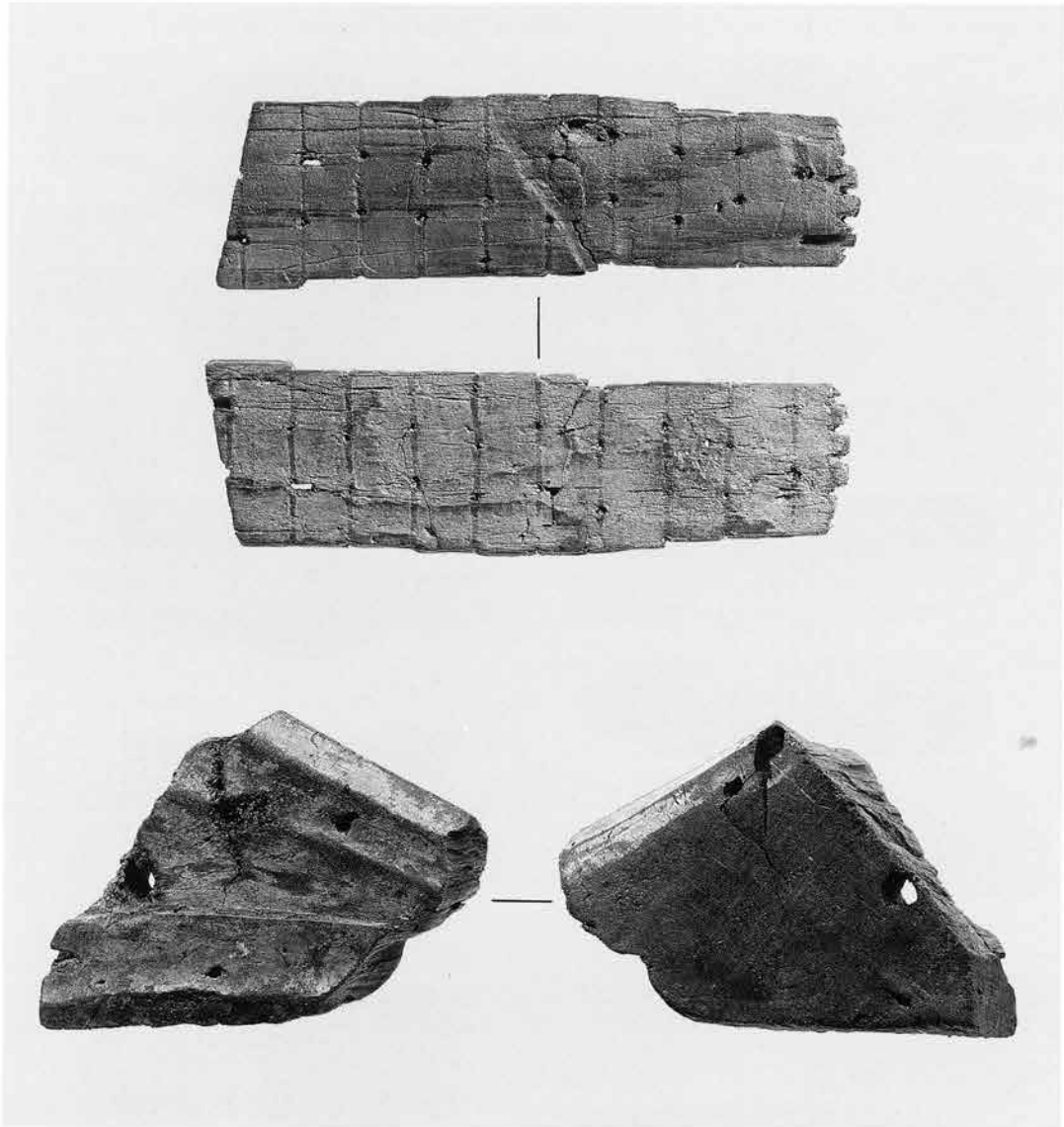
用途不明木製品（40頁中段）

50.5cm、幅は14.5cm、厚さ2.0cmで、一方の手は欠損している。W形のふくらみを持ち中央部に円形の孔をそれぞれ一つずつ穿つ。

琴形木製品（40頁下段）

残存の長さは28.5cm、残存の幅は14.6cm、厚さ1.8cmである。琴板の琴尾部分とすると、琴板の側縁を削りこんだ4突起が見られ、6突起とすると、幅24.0cm前後になる。琴板表面の琴尾からわずかの所に幅2.8cmほどの浅い溝状の圧痕が見られ、左側縁にかけて直径3～4㎜大の穴が貫通する。表面の一部と裏面の琴頭側には火焼痕が見られる。

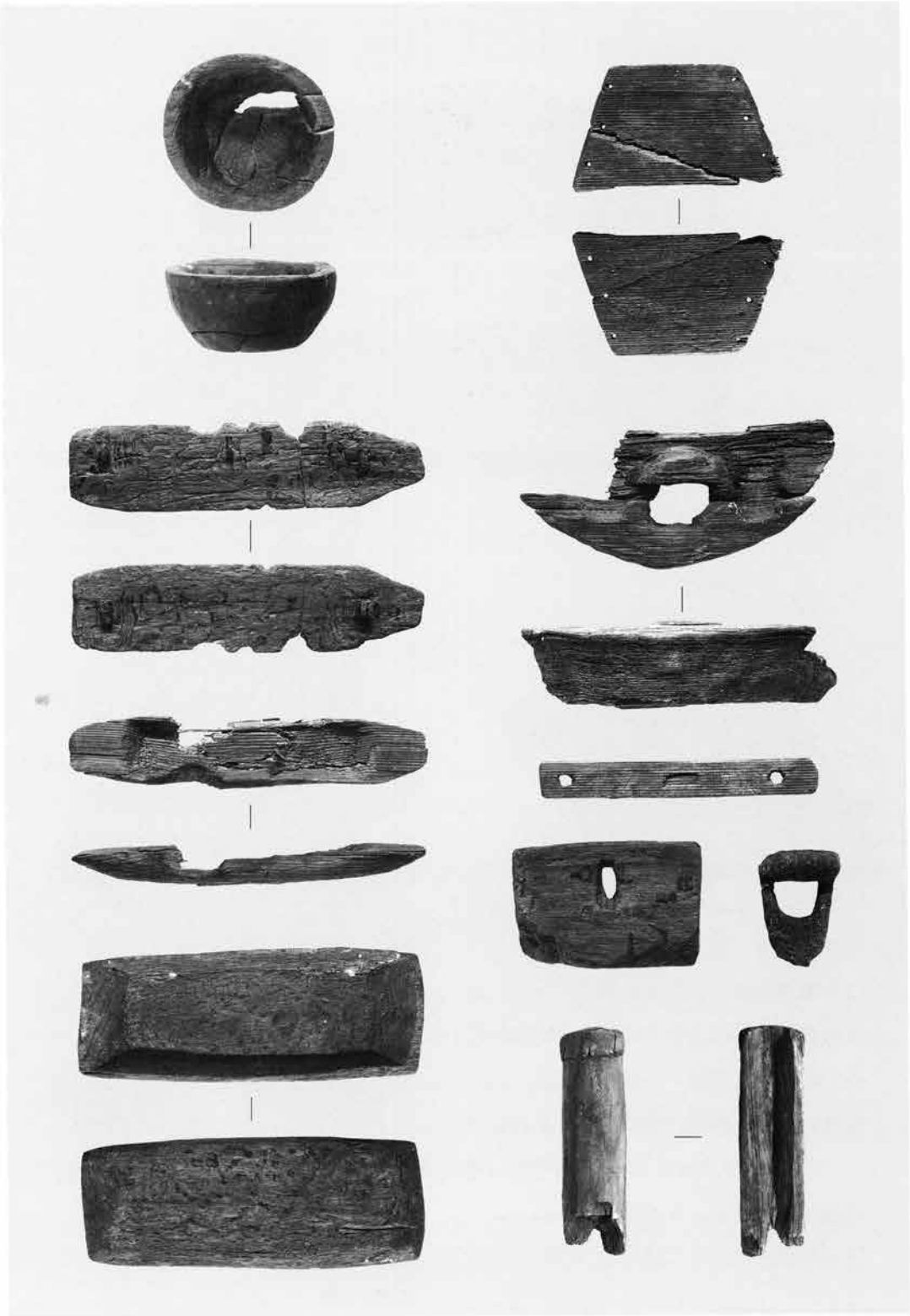
これ以外に、厚さ2cmの板材で側縁部に孔が穿たれた方形の小孔内に桜の樹皮を目釘で固定した部材が出土している。

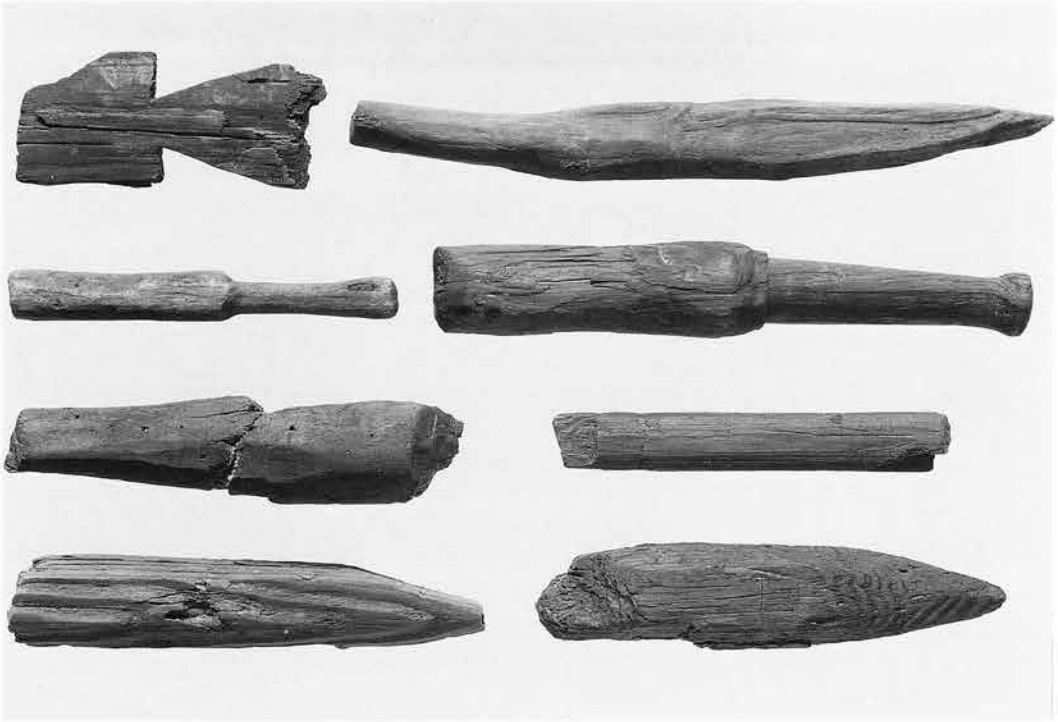


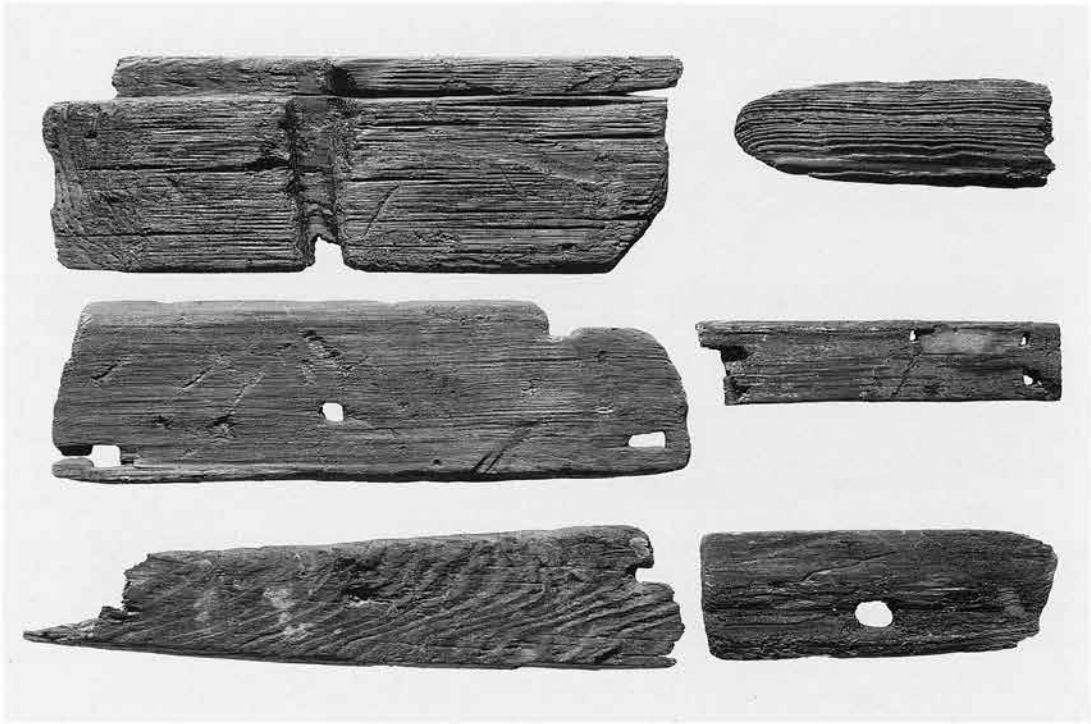
赤彩木製品

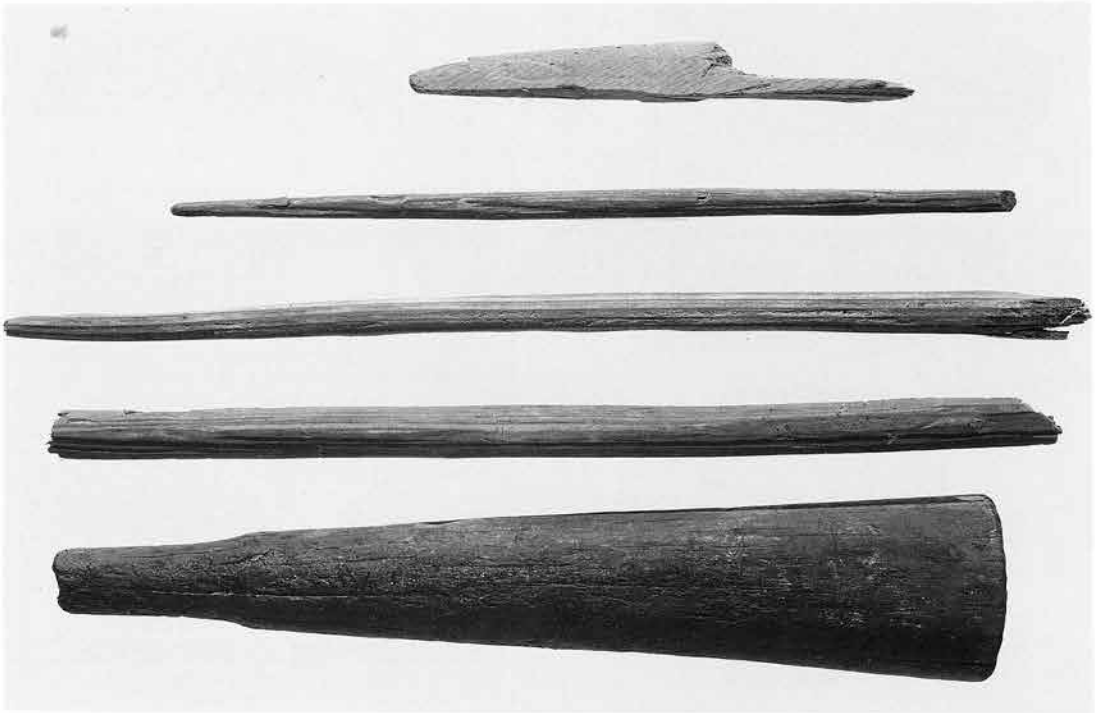
合計３点が出土し、いずれも弥生時代後期の流路から出土した。図上段は全長12.8cm、幅3.7cm、厚さ7.5mmで、表裏とも赤色に彩色され、紐綴じの孔と、幅1.2cmの綴じ痕を持つ。木製の楯[注(17)]の一部と思われる。

下段は厚さ2.4cmで、側面と下面の一部を残し、一孔を穿つ。表裏側面とも赤色に彩色されている。木製甲の一部か。

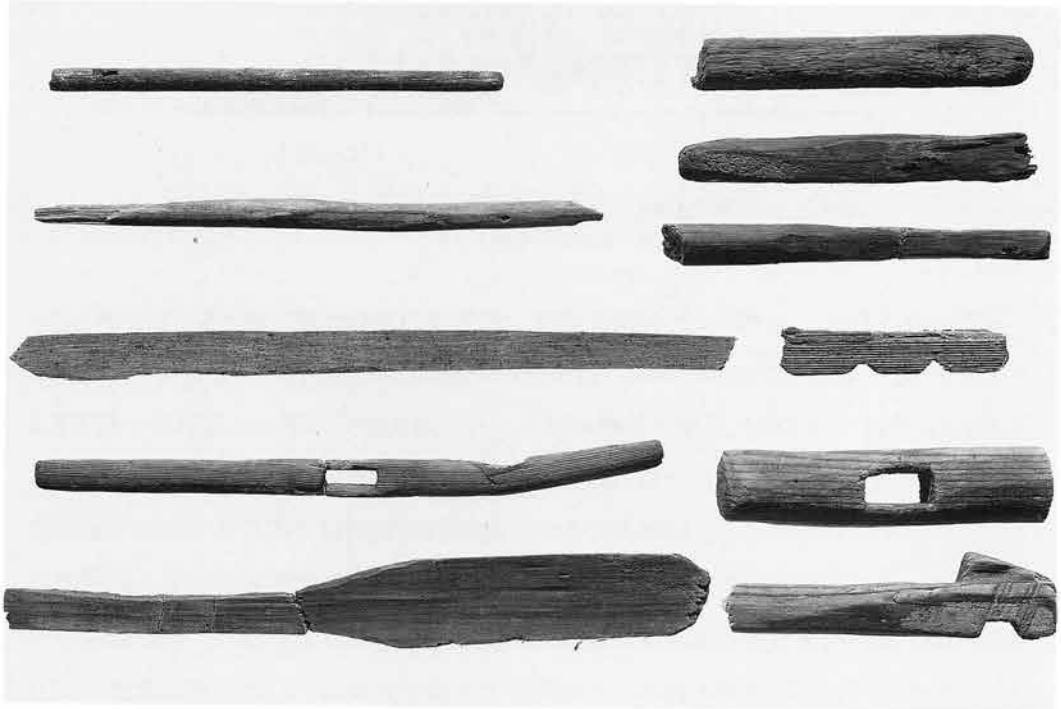








ＳＤ－１出土



ＳＤ－１出土

注(1)　黒崎直「くわとすき」『弥生文化の研究』５、雄山閣　昭和60年
注(2)　石川県立埋蔵文化財センター『金沢市近岡遺跡』　昭和59年
注(3)　上市町教育委員会「江上Ａ遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告』　昭和59年
注(4)　水野正好『大中の湖南遺跡調査概要』、滋賀県教育委員会　昭和42年
注(5)　『恩智遺跡』瓜生堂遺跡調査会　昭和55年
注(6)　谷口徹他『金ヶ森西遺跡発掘調査報告書』、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和55年
注(7)　石野博信、関川尚功『纒向』、橿原考古学研究所　昭和51年
注(8)　都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』51　昭和42年
注(9)　尾崎好則他『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』３、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和58年
注(10)　静岡県教育委員会、藤枝市教育委員会『宮塚遺跡・潮城跡』　昭和56年
注(11)　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II　昭和53年
注(12)　米原町教育委員会、中井均氏の御教示による。
注(13)　滋賀県埋蔵文化財センター『滋賀埋文ニュース』76　昭和61年
注(14)　「鴨田遺跡」『国道８号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』II、滋賀県教育委員会　昭和48年
注(15)　能登川町教育委員会『斗西遺跡』発掘調査現地説明会資料　昭和61年
注(16)　久保寿一郎「古代の船舶資料」『九州考古学』61　昭和62年
注(17)　芋本隆裕「甲と楯」『弥生文化の研究』９、雄山閣　昭和62年

IV. ま　と　め

赤野井湾遺跡は、天神川水門地区の調査で琵琶湖の平均水面（Ｂ・Ｓ・Ｌ）下1.8mから2.0m近い地点で弥生時代から、古墳時代の遺構が検出された。また湾内では、水面下3.5m前後で縄文時代早期の遺構が検出され、縄文時代中期の土器群が水面下2.4m近くで検出されている。琵琶湖の湖底遺跡は水位の変動により形成されたものであるが、その原因については、明らかでない。湖北の葛籠尾崎周辺では１年に１㎜地盤沈下しているといわれ、6,300年前だと単純計算で約6.3m低くなる。一方、彦根市の曽根沼は平安時代東大寺の覇流荘が鎌倉時代初頭に水没したといわれ、瀬田川螢谷では、文治元年（1185）以降とみられる地震による噴砂が検出された。湖底遺跡の解明には、考古学だけでなく広く諸科学の共同研究が必要となろう。

湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 2 赤野井湾遺跡

昭和62年 3 月
編集・発行　滋賀県教育委員会文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話　0775－24－1121
内線　2536
㈶滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732－ 2
電話　0775－48－9780
印　刷　所　宮川印刷株式会社
大津市富士見台 3 番18号